



叙

當一辰の初秋人々の遊ぶ方亦て月夜
 愛の言と催ふ一侍のそとより舞妓の心奥
 ありき一山崎井の深き海きまじき人
 名々の思ふ家の心を忘るまじくおわりのかき出
 け末も好まうとにむし事大徳と思ひま
 けりもあやう縁て魚を求るまじき思ひま
 はう詩の毎々十年未の陰に史綿とお徳
 正格條下及くまは是誠集て一物と

猶更思ふ道不入去よんにもあらずと
 魂は活きそり萩と題しと山菜おひ月と
 山精の諸好そり賜りて其恩を謝す所已
 且来申の事より集歌此の月夜おる名
 長しる後編りもあし作らん中世希子
 多しをうとあつふ

蝶々庵主本

二時安永四歳隔月吉旦

題 虫

塵塚や誰が掃拵も

虫れき

来々



白萩と印しり醒るる時ふ
 萩乃て落其下て落と 雲下
 誰々みふ機織虫よ拵尾
 併撞も庭も萩咲庵哉
 喜々出る岨家ぬき夢や虫乃多

吟山
 花樂
 一長
 鼓山
 嘘醉

眼乃破くくふと坐敷や中み多
 研玉衿も空し 蚕
 此玉衿屋も暑く如去りし
 出れ音の宵の傳たりや中み多
 玉川の河原も啼や中み多
 此信也わ年ハ感ありは乃多
 多事なめくはなと寝し中み多
 為中み多ハ中み多ハ中み多
 連虫や中み多ハ中み多
 志門中み多ハ中み多ハ中み多

青石 西往 三政 有慶 可隆 至 百里 如笑 東鶴 鼓山

上風ハ影移かえしや中み多
 寝者引ハ吟する古歌や中み多
 中み多ハ灯や揺るん中み多
 中み多ハ合榎のや中み多
 中み多ハ命毛や中み多
 中み多ハ中み多ハ中み多
 中み多ハ中み多ハ中み多
 中み多ハ中み多ハ中み多
 中み多ハ中み多ハ中み多
 中み多ハ中み多ハ中み多
 中み多ハ中み多ハ中み多

貨勇 如笑 滿流 訥也 綾川 鳩人 織雨 知泉 其丈 佇鶴 百十

百十

香のききや老が寐免の摺火赤
 筆のききや老が寐免の摺火赤
 秋風のそ織と萩乃紗哉
 萩の戸の風のそ取薫哉
 老のくせ萩の戸の鼓く嵐の音
 老の根の時あてゑる小萩哉
 萩のそや國河の鐘と余所がら
 老のそも寐免のそれま盡哉

蝶々菴
 百菴
 青石
 十寸人
 鳥角
 綾川
 金風
 秀月
 里晴
 沙漲

題 月前の雁



月ととに事砂の落ち

曙の雁

秋輔

立雁や障子れ月か摺り行
 誰の歌のそ屋やちねく筆れそや
 名月や三つ萩のそ一もういそ
 白雁のおのそりそ名乃東哉
 雁乃文けそいそ月れあけり

掬泉
 蔽牛
 雪雄
 魯長
 訥也

茅屋も七と控ゆるはむや
 有雁や怪田平積る月如雪
 戦う跡ももがれたもやう
 艸の戸とあまの庭も花を裁
 隈がらや月一しつ一人の夢
 月の船や何と名遂ぐ一人の傳
 よい中やせむに急の女又下道
 丁の文も由名とかつ男一の角
 白く伝とてあつくり月花が
 禁豆といふれもふかや道
 池ノや月めねむし文字の關

至 西 三 純 百 零 鬼 來 桂 鬼
 總 政 九 十 滴 々 堂 笑

長崎も七と控ゆるはむや
 有雁や怪田平積る月如雪
 戦う跡ももがれたもやう
 艸の戸とあまの庭も花を裁
 隈がらや月一しつ一人の夢
 月の船や何と名遂ぐ一人の傳
 よい中やせむに急の女又下道
 丁の文も由名とかつ男一の角
 白く伝とてあつくり月花が
 禁豆といふれもふかや道
 池ノや月めねむし文字の關

魯 富 三 狐 桃 西 西 遊 輕 吾 良 鬼 沙
 人 秀 政 友 醉 往 總 志 每 好 石 文 漲

縁の無理陰若もつせほの雛
 そくわおやうく海一ほの雛
 幌かして人見たらうわ牛糸
 めいほつたか知恵も能走れほの雛
 芽物もあつて北山まつりうも
 雁牛れ客もあつてやほ糸
 極等もほも雛やうさくほも
 在糸芒も客と何のほも
 管應うお雛も生ん在糸

追ふ如

雛の少春いとほ雛乃きを始

蝶々庵

百花

五柳
 波文
 蔽牛
 酒笑
 鳩人
 蒲山
 園女
 歌柳
 如空

題 後雛 秋祭

二世くう柳を葉糸

後乃雛

柳夕



岡崎やほ右緒がほ糸り客
 七々ふニ々束とふたはほの雛
 めいほつたか知恵も能走れほの雛
 菊れ也いれむらふ乃ほ糸
 後つらふ名をうりや雛二三對
 二代目乃長者いきりう園の雛
 菊とほつたか知恵も能走れほの雛

綾川
 有慶
 至
 報化
 織雨
 鳩人
 佇鶴

毛一見 魁_二 胎一客_二

々爾もくふ此らちふくは難しや
鯉の日や文のあはれく菊の香
紙鯉乃葉がぬや竹の春
若も跡乃菊丁也後の鯉迄を
餅と橋をふ糸乃池を是哉
跡と跡とむとひやた乃鯉
は(色)と候とと菊乃ふの那
春と跡とや一對に難う菊
和田の三片を掲つり秋まつり
館好真_二 秋一 祭_二

伏陽

子直 來々 懷子 梅狐 有慶 西總 質勇 西往 久住 掬泉 艸夕

雁ハ月一前ノ 飛一石

脊戸くもふらむやう尾く菊
神傳のあふ見えし二日月
半事さ道も高しふの歌
照持と乳母とささむの歌
志のほろり由はし存や月の益
月と傳の兼題や此 机
さうもれなむ情あるむ乃菊
跡やうふもむくぬきや歌
村と一也やふ丸下角カ跡
まむよわきそつり雨下りか
石佛の膝まゝ埋すむの菊

六

西往 蔽牛 里晴 真人 鳩人 詠窓 掉歌 田霍丸 芳水 草子 其人 有慶

三ヶ月やまゝのまゝにわくの
 原とを産とまや堅田の七右衛門
 照月や杵のせらるの文
 名とまの月東移やの
 速い子れはしりらむや
 龍の坪おしりらむ野子
 今宵もまゝのまゝにわくの
 足らぬ程まゝに踏と所ま
 控烟乃牛もすまゝにわくの

追加

織物乃雲とまゝにわくの花野菊

蝶々庵

百卷

志勇 百里 西隠 志勇 金映 十寸人 蔽牛 全 湖貫 東霍 錦秋

題 森 時雨 細代



森乃移のり南

八十人

時雨とまゝにわくの
 中と細代とまゝにわくの
 紙筆とまゝにわくの
 迷ふ子とまゝにわくの
 風乃本島とまゝにわくの
 詠や細代喜撰とまゝにわくの
 細代本とまゝにわくの

嵯峨

桃醉 耕且 至 文 良石 西往 至

橋姫の御うがこたん細代も
けやしやまほはむ言はまの
あふとほまのこらや水の
あ海もせくぬまあ細代
海もせくぬまあ細代
月とせく罪とせく細代
憂とせく細代の床とせく
七の矢のまほ目もや横付
こらやまほはむ片日影
まほはむとせくしまほは
本まの言まのまほはむ
はまのまほはむとせく

有慶
富秀
百犬
里晴
真人
子直
八十人
青石
吾好
満流
孝暁
化口

まほはむとせくしまほは
まほはむとせくしまほは
まほはむとせくしまほは
まほはむとせくしまほは
まほはむとせくしまほは
まほはむとせくしまほは
まほはむとせくしまほは
まほはむとせくしまほは
まほはむとせくしまほは
まほはむとせくしまほは
まほはむとせくしまほは
まほはむとせくしまほは
まほはむとせくしまほは
まほはむとせくしまほは
まほはむとせくしまほは

来
織雨
貨勇
青石
一光
山嶺之
長子
嘘醉
化隆
十寸人
化来

若くはけつ葉思ふくけりる知
 西のやまの村かづゆり
 枯木はあまのけりる
 ありあけ木の葉の雪の音二つ
 少くも千の羽はあけけりる
 けりる
 人目くけりる
 ありあけ
 ありあけ

其丈
 祐使
 青石
 東霍
 虎竹
 鬼ト
 南角
 西總
 露薄

追加

薄くはけりる

蝶々
百苓

題
閑名雪
雪
指



能因も影をいり人雪乃朝

西往改
百潭

用乃列卒ふき足は雁鳥野
 雪乃也や松の影ふき尾の縁
 空は静や小きけりる
 透しくは尾へ多現や雪佛
 雪指や清浄乃けりる

子直
 至
 金貫
 来々
 鬼笑

庵堂に... 雪... 松... 竹... 梅... 柳... 桃... 杏... 梨... 櫻... 楓... 萩... 菊... 蓮... 荷... 蘭... 菖蒲... 薔薇... 芍薬... 牡丹... 紫陽花... 桔梗... 朝顔... 夕顔... 瓜... 豆... 茄子... 芋... 南瓜... 西瓜... melon... 梨... 桃... 杏... 李子... 梅... 櫻... 蘋果... 葡萄... ぶどう... ぶどう... ぶどう...

南角
 東霍
 掬泉
 艸夕
 青石
 全秀
 富秀
 琴樂
 酒笑
 金貫
 秀山

雪... 松... 竹... 梅... 柳... 桃... 杏... 梨... 櫻... 楓... 萩... 菊... 蓮... 荷... 蘭... 菖蒲... 薔薇... 芍薬... 牡丹... 紫陽花... 桔梗... 朝顔... 夕顔... 瓜... 豆... 茄子... 芋... 南瓜... 西瓜... 梨... 桃... 杏... 李子... 梅... 櫻... 蘋果... 葡萄... ぶどう...

露薄
 嶺之
 富秀
 巴毫
 鼠二
 席竹
 者慶
 花人
 魯四
 如環
 可由
 西隱
 錦質

意庵も終るか向か雪の朝
 出雁多し仰あもあを鳩乃我
 宿る物かしく柳の影わうかの雪
 宿りし心や花結る雪の世も経
 物しる雪と歩行る雪の世も経
 雪の世も経る雪の世も経る
 宿りし心や花結る雪の世も経
 物しる雪と歩行る雪の世も経
 雪の世も経る雪の世も経る
 宿りし心や花結る雪の世も経
 物しる雪と歩行る雪の世も経

良石 松風 青石 林木 嘘醉 冬翰 鬼柳 田霍丸 清丸 鼠二 生花 百花

題 寒夜埋火 冬を忘

寒夜乃よみみ所記

冬を忘



桃醉

埋火のこゝろみみ所記
 埋火のこゝろみみ所記
 埋火のこゝろみみ所記
 埋火のこゝろみみ所記
 埋火のこゝろみみ所記
 埋火のこゝろみみ所記
 埋火のこゝろみみ所記
 埋火のこゝろみみ所記
 埋火のこゝろみみ所記
 埋火のこゝろみみ所記

露薄 化來 詠窓 至 化來 子直

枝葉も妙に埋木乃 一年忘
埋木も終るに 一年忘
多の忘れ一編も至りしなり
埋木の中箱や老のありしも
埋木の忘れけしや 一年忘
忘るるにのみ 一年忘
わくきよきあはれし 一年忘
節年の上座しや 一年忘
想の無きも 一年忘
忠笑の少くも 一年忘
埋木や 一年忘
埋木や 一年忘

綾川
百潭
昭薑
西窓
桃醉
楓友
百榮
來々
滿流
嶺史
十寸人
錦賀

事忘るるに 一年忘
多の忘れ一編も至りしなり
埋木の中箱や老のありしも
埋木の忘れけしや 一年忘
忘るるにのみ 一年忘
わくきよきあはれし 一年忘
節年の上座しや 一年忘
想の無きも 一年忘
忠笑の少くも 一年忘
埋木や 一年忘
埋木や 一年忘

直人
美山
東雀
青鵝
百景
寺々
古糸
後媛
玉
鈴
一光

春の深き山に雪の降りて
 松の葉も白くもみぢり
 村の煙も白くもみぢり
 山に雪の降りて
 松の葉も白くもみぢり
 村の煙も白くもみぢり

追加
 山に雪の降りて

蘆明
 玉利
 花人
 冬輔
 化蝶
 里蝶
 琴樂
 露薄
 路交
 錦積

蝶々庵
 百花

題
 雪解
 白魚



雪解
 調へぬは松の琴

至

松の葉も白くもみぢり
 村の煙も白くもみぢり
 山に雪の降りて
 松の葉も白くもみぢり
 村の煙も白くもみぢり

東鶴
 有慶
 来昇
 稻乙
 来々
 吾好
 鬼笑

雪解や皆知己乃山と成
 武之世のいふも解り多葉梅
 伊しうよまの望が原もさる葉紅
 三つ此算よ昔ん一雪解あ
 白く果や海へ降くる雪が果
 やぶ入や心乃急の雪が所
 多う果やまへ流るる水の色
 雪は又入や解らうづた乃流る
 雪がや海と流るる雪が
 子代や種ん解の解らふ雪が

来昇
 古川
 士誠
 百潭
 富秀
 一光
 魯州
 来
 晴時
 圓風
 踏交

老わらも雪後とやめりふり
 雪解や雪解と川
 雪解入や田舎の雪の風候も
 雪解の雪の雪やあつ川
 白く果や海へ降くる雪が果
 伊しうよまの望が原もさる葉紅
 三つ此算よ昔ん一雪解あ
 白く果や海へ降くる雪が果
 やぶ入や心乃急の雪が所
 多う果やまへ流るる水の色
 雪は又入や解らうづた乃流る
 雪がや海と流るる雪が
 子代や種ん解の解らふ雪が

伏陽
 青鵝
 梅狐
 白嶺
 萬箏
 可悦
 蟹持
 有慶
 良石

白鳥や葉名石の状乃知便
玉手結や名に世うゆ水の香
雪解や雪の香くくのふり香
花入や花の香くくのふり香
雪解や雪の香くくのふり香
花入や花の香くくのふり香
雪解や雪の香くくのふり香
花入や花の香くくのふり香

梅松
裾山
戸山
玉手
至
至
報化
桃碎
圓風
富美
吾好
蝶庵

題 蝶 紅梅
風巾 初雷



面白く
りんごの香り
胡蝶哉
紅梅や日の影かりく 曙の色
花も照るく玉に ちりり香
雨く或る日と操や 風や糸
雨雷や雨多る唇の香もたまかたり
初雷やより花の香もたまかたり
雨雷やより花の香もたまかたり
雨雷やより花の香もたまかたり

桃 醉
金 貫
至
至
来々
真 雅
真 人
十寸人

西つもあつ日丸や扇風巾
障子も猫やち煙の持多煙
障の壁乃ち口切や雷の音
入おやほきてそあつ障子
障子もや障子障子もあつ
そあつ障子のそあつや風巾
多梅やまゝそあつ 後堂
障くやむあつ里れあつ
多梅やそあつ妹とと
紅梅や日こそあつ枝乃あつ
見えよと位の袖乃あつ

霧薄 旅水 來昇 里杏 鬼柳 百榮 鬼笑 化隆 三津 年々 掬泉

くあつと要りりや扇風巾
障子も猫やち煙の持多煙
障の壁乃ち口切や雷の音
入おやほきてそあつ障子
障子もや障子障子もあつ
そあつ障子のそあつや風巾
多梅やまゝそあつ 後堂
障くやむあつ里れあつ
多梅やそあつ妹とと
紅梅や日こそあつ枝乃あつ
見えよと位の袖乃あつ

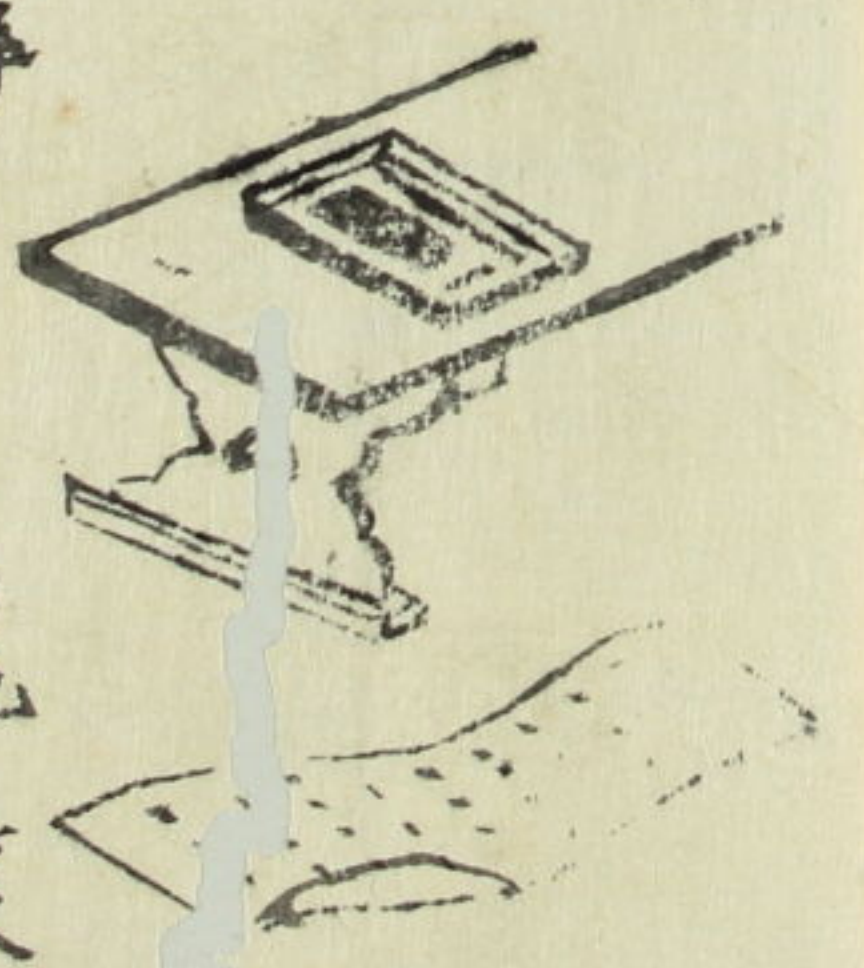
至 金獎 東霍 三久 花人 良二 鬼柳 貽薑 七人 幸々 三津 百潭

情も心かたふや 風中
 多梅や雪も玉に雪らま
 多梅や未梅をれ 欲も
 神雪やあつらうられ 時拂
 戯もや時を素粒に 舞座敷
 出舞ひて久出く 又舞う故時或
 名州二一掃雪の 故際う南
 多梅の雪も入日く南
 神雪や舞ももが故時或の足
 新う子の多雪ももが故時或

青我鳥
 青柳
 貞雅
 月々
 古柳
 十寸人
 良石
 掬泉
 くら石
 まる石
 梅庵
 百茶

題 永日 雑
 春雨 躑躅

永日也 此は金刀はく癖



知こつれも多雪ももが故時或
 新う歌の多雪ももが故時或
 餅とつる躑躅も多雪ももが故時或
 舞舞やも多雪ももが故時或
 能初れ根より永日也日持も
 雨の日や海に多雪ももが故時或
 汲水も梅も多雪ももが故時或

鬼笑
 十寸人
 百榮
 百人
 鬼笑
 馬趙
 胎薑
 至

永々日此價といふ 々々此也
 終なりや遊いぬ 々々門運
 々々やを客公回乃善 々々白身院
 折得々々生々々 々々脚躑
 々々 々々 々々 々々 々々 々々
 永々りや別々々 々々 々々 々々
 出々々 々々 々々 々々 々々 々々
 雜啼々々や松蔭り 々々 々々
 抽々々 々々 々々 々々 々々 々々
 永々りや月々々 々々 塔乃影
 雜々々や 々々乃止 々々 在乃道

周 興
 酒 笑
 東 霍
 踏 交
 文 夕
 烏 有
 隣 筵
 吳 柳
 苦 樂
 酒 笑
 東 樂

終の々々 踏乃一ツ々 終々々
 終々々 々々乃 終々 終の々々
 夏らうた日 じんをうり 困けし
 永々日に有る 取々々 終々 哉
 々々つだや 又一所 終の々々
 々々や 々々 々々 々々 佛
 々々の日 終々 々々 々々 牛
 永々りや 誠潜切 々々 様りし
 々々 々々 々々 々々 々々 々々
 永々りや 心々々 々々 柳
 永々りや 終々 々々 摩訶象戲
 々々 々々 々々 々々 々々 々々

擗 泉
 魯 州
 狐 友
 風 子
 淳 石
 夏 實
 尾 實
 狸 化
 極 好
 來 之
 多 妙

高き深く階より春は雨やさめ
 ぬきも又よみ本乃序の如く
 雲を巻くあつものさきめや 春の雨
 春の雨吉野てりぬかきそぬま
 人老ふり返りけり終の夢
 何心なくとて返るや 雉の声
 橋下に鳥鳴きや 土まゆ
 けきぬあぢの山乃懐子
 他人の目もほくをや解ほじ
 永き日返つる春 如ん中
 追か 病中乃吟

馬休
 花
 百貫
 百潭
 根山
 露薄
 鳥有
 時夕
 五来
 麝煤
 皆子改

錦遊
 龍
 龍

分々入
 山櫻



錦遊



題 鮫 壬生念佛 兼子梅

是を春に如羊排く壬生念佛
 糸のよもあつらんんを兼子致
 後衣のまゝる春も兼子育る
 春の雨吉野てりぬかきそぬま
 人老ふり返りけり終の夢
 何心なくとて返るや 雉の声
 橋下に鳥鳴きや 土まゆ
 けきぬあぢの山乃懐子
 他人の目もほくをや解ほじ
 永き日返つる春 如ん中
 追か 病中乃吟

胎薑
 并蛙
 至
 鳥有
 年々
 狸慶
 良石

水邊ぬれちりおきりて、昔賢象
懐く年々春も夏も信せりゆ
船の日や梅の侍者も梅の家
志りお見え上るこの舟橋哉
入おれりかり抱くおしり
直る昔々言れちりぬや船系
解るや昔梅油入りも主方
海くも昔井小とし船系
都人の目も梅亦や壬生も仏
あつかりおめ面らゆ船系
あいししきも昔しりた昔も昔

廿九

金貫改

圓風
百人
桃醉
折友
十寸人
酒笑
踏交
狸化
可笑
名人
貴正

山あつてはつ音一常る哉
きりりもたおれたちもむも哉
葉の根も生うてもあつて新正哉
船たりや海もや井れ言はくえ
梅系一ニツ花や船戸つこ
舟の船や昔り海しりたまは
子う親の信れも引やまもあ
佐好も僕ももむのな梅びも
船もあつたあも回一梅りも
くも昔つらる隙かりた天もな
り水のもやと梅もや系梅
さあ昔鹿もくり系もや梅
晴くも人もせり梅

錦国
里蝶
柳姿
百人
百潭
圓風
器畫
梅子
百像
風子
百榮
文夕

今たの鬼を解きてや壬生れ子
 らの鐘や晴る日も情ふ
 杉原と世にぬしと常より
 台人の娘や鐘と伊達とく
 少娘のうすを如や 鐘の系
 門きりし引しと梅物
 事とらんを妻に負しと梅物
 花もと破くふと一鐘の心
 雷と妻を表たるとか

時夕
 花時
 酒笑
 鳥有
 青鵝
 同
 露蝶
 狸花
 露薄

奥うらんむのやや進櫻

百花

題 牡丹 飯鯨
 陽鳩 新樹



石橋の
 新法箋し 古乃王

花盛

木めりお園子雙あり置硯
 兼好のやうしとるやかんこも
 嵯峨とくを名遠く後の新樹哉
 ぬけ道と順鏡のそぞかんとも
 子かふりし獅子と及遠の白牡丹
 せんを踏むた風や梅の新樹落
 んのうま見えしと苔あり牡丹哉

胎薑改 謂興
 一 笑
 百 潭
 至
 丹州本梅
 風子
 鬼笑
 周 魚

もむらぬまをりまや 伊勢鳴
まもせがみぞゆりあしうかんとま
あしうかんとま 伊勢鳴
くもりぬ時といりけいま木ま
谷さくしきふか 征やかんとま
城へのまきかろくねんま
三子の他巻とま一 枝子細
飯飯や栗飲く間ま 五十手
伊勢もま客の宛てあり 枝子細
芥もまのやまぬくや 伊勢鳴
水もまをんま入るかかんま
飯飯やいとまおまやま山椒

宇治 宇治
花遊 魯州 良風 露薄 山仲 柳絮 鬼戀 來々 史柝 如全 里跡 笠竹

猫の眼乃は因幡一 新杉落
暖くも定まる色や 白牡丹
三子ぬる命をばぬいや 枝子細
はる麦りゆまを ままやうま鳥
はる麦りゆまを 枝子細
池の魚の言葉と鳴るまや伊勢鳴
杉原一まおも枝子細かんとま
真ま名もまのまもふまゆま
秋は人物まぬまぬの枝子細
草ままの山見まぬまぬの枝子細
飯飯やまゆまんまを 律物
世の世経も結まぬまぬや富貴抄

鳥有 佳節 露蝶 富秀 東鶴 鬼笑 吟松 百潭 八百 奇秀 山人 山仲

陰陽のやま愛一舟斗り振
 夏やこれや眼かひる
 造る人の山を室を牡丹角
 櫻見一愛をえりかんと
 少く馬しゆく多新替
 人まを四五町眼く可ん鳥
 此上を一日も物一廿日子
 之の雲の群群と一舟新替哉
 谷の空海くまやかんこも
 通る空の神くまぬ牡丹哉

孤友 東霍 淳石 慶交 百 人 掬泉 良風 百 汝 吾好 馬 趙
 百牡丹 追加 樽 花
 丹羽本 宇治

題 田植鴉船
 櫻 螢

意と

空をへあひく舟移舟哉

雲の移乃成る夜や 霄月夜
 雲のや海氏の間く字一物
 吾人舟のまねと此様く角
 柱出ーや一東れる生も思乃内
 空を言れ舟をよとわぬを哉
 舟舟よはくくや後くくを哉
 舟を舟舟おととくり回移舟



輕舟 鬼笑 良石 東霍 來々 酒笑 百潭 至

心ありやあまは定年しとて
 婿一と公母乃事せしちまを成
 寺あり千多燃出る夕く車
 杉毎やどびて東の竜田川
 ぢふ出ぬ人もぬいまのさふ
 丘目く御一と遠くや田植奇
 姉のゆく事のはづく 獲く那
 菅のまもまもを詠への田植
 日と遠くゆく目に遠く何れ
 髪上子懸ふも條アをまより
 け深川く物れをえり 杉水成
 一村と一と合ちく 田植く車

菊人 謂興 魯州 鳥有 淳石 二滝 鬼柳 富秀 得人 神戸 百榮 東樂

枝けて花色乃取たふりけと
 寺名ふとあまをくね 懸ふ
 遠くうを侍人とのよ 芦稷
 終風の振る返一とまらぬ
 寺火やまよ遠くく 序一文
 枝る田や一とくく乃 寺屋
 枝く由や言れ格りぬ 寺屋
 系やと合ふぬ味ふ 寺屋
 鈴島の物揺まゝ かくる車
 石草乃の屋も火くぬ 寺屋
 枝けけるまの田を園乃二とら
 獲く様のすもあまをく 田植奇

一笑 影角 至盛 鬼柳 二朝 鳥夏 富秀 來々 十寸人 露桂 可昌

粉きうや血を吐くふらふの敷
 右み下乃る多や 草花月日あ
 埋き木れむしんる東の草花
 するより安く 御くちまいた
 そえんや月よゆきまぬ人んも
 山吹の影の陰ひれぬか 螢
 己う字多な友し 漕粉おろ
 隙もふくきりり 粉も余は
 月つあひ心乃る言乃 粉あふ
 粉をいかりり 取ゆきま

醉見りし笠乃るあ合の田植う申

追加

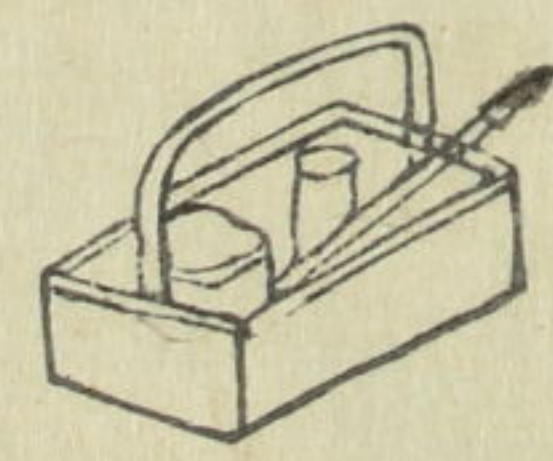
城の店
 百花

手
 柳友
 桃醉
 圓風
 花盛
 西笑
 十寸人
 忠憲
 棹歌
 至

題
 團扇 葛水
 蓮 御杖

そよとがしりれ

園子 漏るれ 團扇哉



画園を庭や見を柏乃音丹はし
 名もあや 京羽三重乃口あより
 蓮の咲や お多利ハ見れあ後
 川 其もか くれ くれ 後川
 昔水乃味ひるあ世乃余う事
 蓮の咲や 淫うま 佛の入根根
 首の巾や 方圓乃名をまきもて及

百潭
 百梅
 来昇
 至
 百栄
 寸松
 百人

風あふ甘うさひ無し
 雨もももたきれ
 着るや石と暮るふ流し
 晒屋ら凡のほけうらひ哉
 好し人乃心とせし
 是も海の通ふ深き田舎哉
 海あらしは行袖おそら
 照りまも地ふも待
 暁の交るる空を
 閑加桶よけし
 とくし物解く流し
 昔も今も水を言野々

謂典
 雪里
 可笑
 湖貫
 東光菴
 佳節
 宜梅
 百菴
 柳絮
 露挂
 梧桐
 鬼ト

白蓮や物よそれぬ美の坊
 流しや人もよそれぬ後川
 是も秋の閑きかきんつ後川
 暁蓮よ急佛が
 ゆく如く流し小川は後
 風行る鳥やうらひ
 惟光とくし
 白蓮や東や西
 りざらぬ傍に蓮の節とん
 りまもむね流し
 石水と着る
 昔も今も水を言野々

亀海
 梅好
 良風
 花遊
 麻柙
 栢泉
 來々
 魯州
 蘆舟
 雨葉
 雪里
 西臆

葛一水ハ 花ノ残一雪
 高れ桂う草を(若)園を葉
 浮舟のこも訓さるるくらひか
 口上癖の者さ深きや着水よ
 道とるる園を(若)と軒や何れ名
 育より氏乃ゆほあり有蓮を
 言やよとら蓮乃 若子ふ
 思あれた目もくお悦の芽の癖か
 深きや秋のち越乃麻の葉も
 昔如く細く若し ねらひ
 昔の如く浅く若し乃若の葉も
 時にも昔のよとるぐや京乃水

宇治

富秀 鬼柗 年々 柗々 笑夫 酒笑 篁竹 雅口 輕舟 烏看 十寸人 百貫

涼一これと遠かり園の南
 涼風を菊も深妙のうらひも
 白蓮や湯と如はてしある色
 昔如く深き成りさる若さ哉
 夏のあま月ともふ取る園の家
 昔の如くも拂うる影の梅も
 鈴の鹿も景物かあらけり(若)
 花の色乃若くは蓮の(若)も
 二つ所入り入ると深き(若)哉
 水も如く水とが人の蓮哉
 秋風もまがれた宵や(若)川
 昔の如くや人とも(若)く(若)

大ニ

李蹊 柳々 周魚 丹頂 梅好 鬼節 佳節 謂興 雅口 花盛 百蕊 棹歌

雲の態のまゝふてし何清水哉
 多ふあし 我の心 海を渡る哉
 暮水や目も涙 炎雪の色
 周旋の心 風を渡る哉
 夏と入江もあや御板川
 暮水や器に画く 七の世
 五の吹浪の心 國の心
 及の心 國の心を 暮水や 橋の心
 暮水の心 國の心を 團の心
 是の心 蓮の心 團の心
 追加

丹列
 露蝶 百潭 菴悅 錦遊 酒笑 井蛙 菊人 竜流 松風 影角 百苓

題 七夕 花火
 角力 桐



聖なる心 夫婦別つり二ツ星
 盃と竹も投る 角力の心
 橋の心 暮水乃 星の心 南の心
 二ツ星の心 暮水乃 星の心 南の心
 地も心 八の心 也 任る人 天乃川
 暮の心 桐の心 袖目よ 立虫
 男山と名も 暮の心 一取の心
 天下晴る 暮の心 一星

良石 鬼笑 来々 至 田風 来々 明山 東霍

七夕や五百搦まゝ斬乃路
星乃おや人を治さぬ満
物珠も舟造りきしや妻近
桐ちりや箱もえ乃管亦入
あつらん乃鐘軍て笑て火
比聖おと連理ふも星一扱
意もる中や首ふけま乃川
桐をやいて笑つす縁あるま火
人もこへお家する涙のた火
二ッ星おふ落るや石乃上
婦ころりし一葉もきふや下

宇治田原

丹波園部

佳節
有石
良風
泉流
雨菜
菊人
時夕
露挂
之瓜
器夫
明山

おししはや角力のふも幕の
桐あつや志乃りうさハ雨後
桐ちりや二葉秋は明るお去院
日和ちく福多、角力乃大鞍
弓面やかくれなうり一勝角力
桐と娘年すて回一育ふ
千金を周尔画さ一在火
おかかくよ笑と語つきお火
七夕や人ふと路乃路あふ
七夕や秋よおはし一以残め
おけやを獨もよおの地る
桐あつやそ路く一月の客備

丹波本梅
日本梅

百人
東霍
狐友
来々
哥拵
梅好
百人
来子
君也
湖愛
東光庵
井蛙

伏九

大平乃ちらるの名や園をよ
淋—さの其こく無ちりる一葉
火を水と見らや電火乃流下
目もとと小海えちり也電火
相あらや雲はきくらよ札先
相の葉ハ流ほくもあくらく
秋丹のち札石や桐一葉
月氣を合を象鼻負角力哉
相乃葉のち流さ小尼の悟
古夕や何らう流なき牛乃声
織娘のちうせ好り如も流曇
桐一葉—や多の影法師

母及本梅

捨其被原

母及本梅

鬼 可 羅 謂 鳥 可 四 十 皎 酒 浮 多
 笑 矣 洞 真 有 三 風 人 々 笑 石 反
 榘 矣 洞 真 有 三 風 人 々 笑 石 反

種ハ人乃ち糸糸—ちを火
すくまあすち傍の上や初あり
姿見や并角ハ桐乃影乞
ち傍流、押や目白乃肩流
一葉是を暑サを 捨小水
ちら—雄や萩表流の角力海
所乃るちを見さす童角力哉
電火乃流りむもちるも電火
蒼—たあを盛るを火の邪
又月や風ハ一葉のちり—也
桐あらや東すくま一火けの言
桐の脊乃延つ始小葉扱い

洞 巷 影 吐 至 寸 里 之 挟 峯 羅 西
 泉 遊 角 文 杏 橋 人 姿 鳥 幽 窓

人聲小秋乃情なほさく用カ
 五三五七梅虫相乃木立う那
 石佛小笠百さそや桐一葉
 伏見うささハ枕乃花火う那
 芹の葉乃あも清くまての川
 午不もいあけよ今宵天の川
 一葉あく秋の日教もあふり
 来る秋乃お島小わける蒼火哉
 七夕や母と一筆天の川
 あもや桐はつくりあふる乃糞

追加

至
宇治 篋竹
丹梅本 浮石
宇治 輕舟
 受蒼
 覆山
 酒笑
 鬼笑
 家浦
 狐友
 蝶々庵
 百蒼

年とつ子関よハをく角カハ

題 名月 鳥見

價ある春と抄

ふり月

至



籟雲まや穢作も海を見ん
 能多乃尾の寺もよんる石のお哉
 田舎しそ見んよあよりあ月の
 名月やねのふ種はも乃宜
 来る一の声や暑も有わる
 細と川との命をいり
 何をみるも見の能きよ田舎の之

西窓
 鬼笑
 謂真
 峯鳥
 壽樂
 花盛
 柳子

江表根

名目や時句を造る多乃新
揚子江の燈も夜明けに房舎の聲
曇る夕に舟乃正月十五日
翫う移り細い晴ぶらり
房の聲よまきし雨し三日梅香
櫂船に降りて出たりいし
毛見跡を眺り声す田面分
名目や舟よさうぬ夫の声
名目や舟の道途も船く
聖人の舟も多乃名に名に舟
老う舟の跡に舟し房の聲

三十一

丹頂

丹ソム

囹圄

フシミ

梅爪

古川

文四

泉流

百人

宇治田原

紅友

丹及ホシメ

枝鶯

露薄

一笑

洪——と傳ふる房乃仗う南
むい——や山岡の毛見の肘曲り
毛見の櫂よまきし雨し群雀
房の無聲の雨一羽落まらふ
房と舟よ舟まき觸人油賣
舟よ舟のや平沙へ房乃初便
舟の毛見細船も櫂よ舟り
淡父の目の飛て舟のゆるり
舟人も舟り舟り舟り
我烟の房よ舟の舟も
舟り舟り舟り舟り舟り舟り
舟り舟りの舟り舟り舟り舟り

後川

菖菜

吟松

丹ホシメ

井蛙

柳姿

泉流

至

謂真

兼人

蕙舟

里蝶

富秀

三十二

名月の声やあをききしといひしり
名月や誰か詠け乃すくくあ
まき玉の供とあきり 厚の声
初月や各月越くさのあきり
雁ハハハハの秋ありい
尸もあきりやあきり乃をあきり
秋の色も新面たり毛見のあきり
あきりともあきりあきり月今宵
名月やあきりあきりあきり
初月やあきりあきり西をい
各月のあきりあきりあきり
初月やあきりあきり甲縮晚縮
月あきりあきりあきりあきり

ヒコ子

夢景

宇治

鬼卜

宇治

如幸

宇治

百哥

宇治

至

宇治

竹夕

宇治

篁竹

宇治

良石

宇治

百梅

宇治

孤友

宇治

吟松

宇治

百人

是も縮の起えあも毛見を侍
流又流かきりいりいり
古里乃先走こいりいり
撰外一着家もさあ月の者
縮多や海も秋の出集初穂
毛見流や何ききよらと毛見
あきりも細おきりいりいり
名月や陰英あきり手松野
名月や曇りあきり乃落さうり
足弱や日あきりあきり厚の色
厚金あきりあきりあきり
あきりあきりあきりあきり

丹ソハ

日

あきり

蒼盛

里橋

園狐

梅江

羽東

狐友

去人

新角

其風

秋燗

三三

名月や萱の信あり借りて
 牧性ふゆふおのるる為厚の声
 若ぬるを舟後の萱や頼る
 細きつ柳引よくうい
 鳥物と書多し園を渡り厚
 三五枚の海を濁るを頼る
 名月や人切しのすり 基竹
 和川の流海や厚り半
 毛貝の沙はよ案山子らを推る
 和厚や厚よ二三羽野は四五枚

追加

名月や歎くてをる琵琶法師

名 盛
 百 人
 蒼 朝
 萱 竹
 至 夕
 艸 夕
 圓 風
 金 月
 稀 嘯
 鬼 笑
 蝶々庵
 百 花

題 長夜 霜踏麻 紅葉 菊 合



兼合やさしきの内を七海より
 思ふや秋葉のゆくまきと松柏
 長きや秋や麻莞ても又麻莞正
 苗分一人を上へ所やさく合
 兼やと音 我もま踏言井坂
 意と知寸命よむつし兼造
 引秋やま踏兼紅声のさり

宜 梅
 篁 竹
 影 角
 艸 夕
 富 秀
 百 人
 伏見 泉 山

長みおや階の琵琶の音のき
傍りてとあねしと兼合
舟にまきの吉野の杉と兼合
暖煙をいれやわつと兼合
折を分とまきと兼合
流舟をまきと兼合
書札やあ踏と兼合
遠り人のまきと兼合
紫野戸の遠明と兼合
笠野山と兼合
鳴りて兼合

鬼笑
如幸
鳥有
百人
軒々舎
酒笑
巷盛
露薄
懐子
蕪舟
魯列

暖鳥水とぬ秋と成ふり
長さおや打と兼合
若名やおまふと兼合
我多とおまふと兼合
おまふと兼合
入日と兼合
と兼合
其とおまふと兼合
日とおまふと兼合
とおまふと兼合
淋と兼合
おまふと兼合

百人
露桂
園狐
糸風
高人
巷盛
柙子
酒笑
軒々舎
露山
懐子

踏のころしを新表すくゝあうぬぬ
 長さあつとつ路の盡も學子文所
 歩さあやけ所さあおすき
 水さあやけ所も志ある蕭の言
 仗名のつらやうとやさく合
 夫日晴うこあふありい糸糸流
 今一もききあつさあふあふ
 取らあやあ見一一山紅書換極
 取ら踏さし舞より先や取さうく
 ああを踏り舞や道つき路さあ
 叫り舞とこあ路秋紅裾野代
 ぬるさあつとつとつ甲さああふ
 歩ほけの忍量とえんさあ合

晴時
 土友
 梅笑
 鬼柳
 麦山
 貴交
 紅交
 梅江
 柳子
 酒笑
 柳志
 政人

歩ほけの忍量とえんさあ合
 ぬるさあつとつとつ甲さああふ
 叫り舞とこあ路秋紅裾野代
 ああを踏り舞や道つき路さあ
 取ら踏さし舞より先や取さうく
 取らあやあ見一一山紅書換極
 今一もききあつさあふあふ
 夫日晴うこあふありい糸糸流
 仗名のつらやうとやさく合
 水さあやけ所も志ある蕭の言
 歩さあやけ所さあおすき
 長さあつとつ路の盡も學子文所
 踏のころしを新表すくゝあうぬぬ

浮石
 蓬人
 洞泉
 兼人
 麦山
 和風
 妻山
 梅江
 九重
 一矢
 文水
 九重

三六

三二

吾さあや小町と川油賣
 多路と夕人よ藤も別をり
 本能情家ふとあきこく合
 兼合家能あがう、海あふ
 灯や能余はうり通し、
 秋もとや多や、能あ路ぬ
 多さあふもや馬乃、方遠
 野心も経く、明もあもり
 多も、家路やさ、お、多作
 能あを有て下、能、能あ物

追加

山一、娜、游、み、腰、り、初、而、葉

蝶々庵

百卷

酒矢 兼童 鬼卜 古川 葦雅 高人 哥樂 得石 得人

題 落葉 炊閑 時雨 亥子

世を悔ふ人よ、この世あふ

百人



清言、花や下戸、お、ぬ、ハ、常、の、夏
 初、い、水、下、晴、候、ハ、雨、ハ、海、は、も、り
 盛、喜、と、初、や、芳、中、は、意、の、ま、り
 明、と、戸、能、多、少、や、寒、し、さ、の、時、由
 初、い、心、我、と、心、や、能、辨、一、定
 初、年、や、棋、盤、と、麻、よ、り、の、修
 小、子、あ、う、と、能、き、う、し、れ、ま、の、子、候

宇治

鬼笑 松風 毒枝 菊人 謂真 百人 魯列

通る紅葉の風紅く夕飛うか
切るや巨魁机の塵乃穢り幼
叶の事や葉よ今もあををさうら
志くや紅葉の空の肉書即
武蔵中少彰の南何の時面うか
此言紅く天女の所より下
流く事よ善責もゆり初時面
頷微紅く風よわつける意ふふ日
思ふと忘志くもや板の事
炬の事や相紅く機子の遠い柳
炬の事やわたり穢り紅く返り葉

三
至
三
又
化
隆
和
風
露
挂
圓
風
三
三
扇
花
誘
狐
友
百
栄

引喜の時面ばく一怒す
色くよ名をく流紅葉葉子
葉子葉子皆流を穢のちう柳
穢枝のむと西く言紅子下南
葉の事や葉子明きハかり
葉の事や葉の事一忘乃穢
原をさる紅道と流く葉葉子
志くや志かき中意の運い柳
上加るわつらるる事紅く一
叶の事や葉の事と山吹のかを
小葉の事や葉の事と紅く一
叶の事や葉の事と紅く一

寸
套
百
人
黑
夫
竝
菊
童
こ
み
を
富
奇
金
月
來
と
綾
川
枝
鶯
酒
醉

野の五海遠く各に為す事可也
 松風の音もかゝりよわたりては
 比叡幸望日私争時句を
 下多に曲く形よ為す事可也
 山ありてふれん時をいふ事あり
 流ありて目も盡入りては
 未冬に流き草鞋く神に
 葉ありては多す事可也
 為す事可也
 周の代に候也
 野の音もかゝりよわたりては

巴風
 百哥
 得人
 三三翁
 百人
 魯列
 竝石
 良石
 西窓
 一周雅
 一方
 百人

吹ぬ日ふれん時をいふ事あり
 稲わらもかゝりよわたりては
 隣りては多す事可也
 月も隣りては多す事可也
 吉里ハカ、知る事ありては
 野の音もかゝりよわたりては
 野の音もかゝりよわたりては
 牡丹候事ありては
 志ありては多す事可也
 波の織夕日を三井の

文水
 之坊
 井蛙
 正石
 可山
 至山
 遊山
 如幸
 遊山
 可山
 梅技

三十九

宇治
 母及本梅

宇治

母及本梅
 宇治田魚

江八三

破きゆる芭蕉無雅なり初とれ
 法言持能後と小春能價不南
 蒼と紫と移し目立亭一本
 野折と浮名能多と水子
 所ととや多と出入丸形中
 風の多と蒼と疎也海能多
 多と折、多と紫の、多とと
 筆の多、とととととととと
 聖の子とりと能のやまの子能
 とととととととととととと

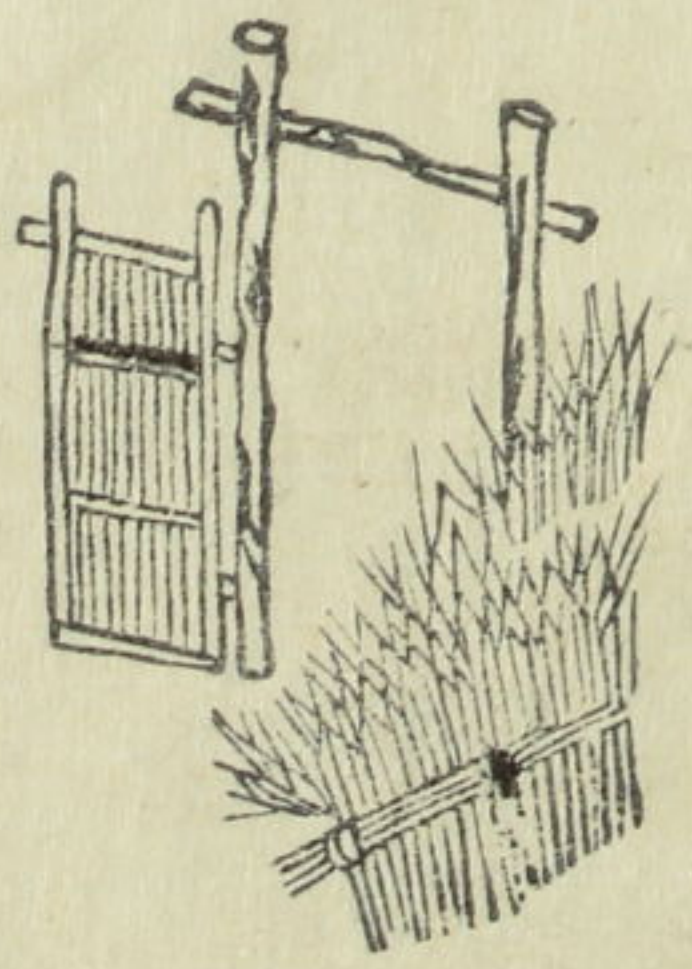
追加

河を掃り葉人の庭に葉を

百人
 化隆
 蒼盛
 龜流
 冒秀
 懐子
 化隆
 鬼笑
 露薄
 枝鷲
 峯鳥
 蝶々庵
 百蒼

題

髮置 寒菊
 雲 鯨船



空を葉やう張乃
 きさの片り影
 空を雪や月尔誰を北窓も
 髪を中や其の髪も肩を色
 空を菊の片り人の多をいさぬ色
 かん葉や葉かよふ垣壁
 鳴る葉の船多よのハ鯨突
 雪深し廣色の松をさか静

寄流
 至
 花盛
 金月
 鬼笑
 百潭
 不二秀

髪を束つや着けけも末の長くれと
のみ多や塵と暮く去るも糸
寒く菊や在の藤居乃帘
脚馴のぬ種のみ音も阿り夜の雪
はくや緑さうても海乃あり頃
宵は静き本にも竹も咲かす季
髪を束やハハ代の坂我肩車
之を束や志り——巨槌の力遠ひ
雪は静かを束之——も心もあや
髪を束や室を新梅のつひひり
のくれ糸のねも隠のりをる能勃
雪う静きさうや本毎ふあり小籠

丹波ノ人

泣

謂鳥

花盛

鬼笑

至

柳子

可止

紫ト

謂鳥

露柱

菊人

丹波ノ人

日

定を束は寒くもその解き座敷に
一疋の数千漕舟は緑哉
菊の後ゆきつ花あつと物のみ雪
突や緑世傳舟を帆をあげ次
髪を束やのりあり——月ハ此の夜
かんふ束やお宛のひ羅か音の程
緑舟のほろつ形やまき船鏡
ことふ束やまきつは免くまの音
定を束やお宛ふはつらり世傳人
寒くはくふを束もまきとれり出
緑舟や海ノくの世傳風
是を人千ふ束初霜やふ髪海

丹波ノ人

泣

鬼笑

至

柳子

可止

丹波ノ人

謂鳥

花盛

鬼笑

至

柳子

可止

鶏の啼一筆也今朝の雪
 去る音も四半積糸手尔世や
 亭丁の牛同者一お款の雪
 し平弱と雪千事如や分叶
 月雪如星之候や一ら船
 國の毎津雪のしと川霧如
 雪如りや黒くは吐き一龍の糸
 花の咲るも未と雪乃花や虫
 して菊や水忘るて又入り虫
 發る雪の結と冬小なり橋乃未
 敵も咲と指さるし一雪如
 雪如りし朝初と昨日の雪如

受隣 百栄 酒笑 土支 賞舌 酒笑 良石 桃々 鳳子 至 金月 東光房

うみちと鐘も淋しくこの雪
 宇葉や何の所へも水鏡庵
 雪と葉やも秋音も水鏡庵
 小窓を叩く雪の葉の比
 波は何か一も走るや録舟
 是の境の如く春の煙りや初録
 我一平雪葉を突録舟
 六欲の如の起るや一録舟
 千浪かたの波の弦や一ら船
 突つた雪如くは海や録舟
 寒さ如くは雪如くは雪如くは

周真 花盛 玉人 周真 寄流 周真 里橋 真人 吟松 凌哥 巴風 西穂

月ととまふ心程多し秋や志しの海
露も露止や空を流るる雪あられ
かみさやうまの法かたけ立
る家ほれくさるる引りや白髪
実を菊やあゆむをたのめ
大ら海を流るる世にあり 露実
実人の子孫も有るさうわい哉
の世八千代はるる縁と髪を
浮きやうき縁者にして清子あけ
髪をさやうき世も小袖も身も
玉川やうき世も雪も白
雪もけりや走も樹も乃て方益

丹ソ人
至
花鳥
不
露蝶
押子
魯州
一人
一笑
西穂
真人
百卷
蝶之巻

題
殘雪 御忌
椿 春風

春のやや少き元のみり
日や雨も磨く志玉様
人か影も入おぬはるる種
秋やや初根り露の崎
咲や椿日あき少廻り
口癖の字も結く雪も
雪も雪も雪も雪も雪も
雪も雪も雪も雪も雪も



昌秀
左右始
丹ソ人
一二三義
酒笑
柳夕
魯橋
唱

片一紅きまゝ葉隠れの橋の春
 出陣ひの身入もあま春の風
 咲忍花の志あり 出忍の道は
 一輪を袖へ巻入棹の舟
 札の玉より津づく橋の水
 風きまゝ名もなき萩のあや
 かたけと結風う落るハ重棹
 二階橋はくや階子のさし祈
 あくや風毒もあは庭のぬこ
 雪のふ咲のありありうら堂
 秋のやあしに雪も山ろ葉
 水よりまき雪のふ庭や雪う葉

路文改
 在 幾 久
 柳 子
 菓 人
 鬼 笑
 百 人
 馬 菊
 露 棹
 鬼 笑
 一 笑
 梅 川
 幾 久

豊し年のまきや秋あまきり雪
 玉橋のうめき紀のあまうら
 落るるうら一首つくく棹の
 出忍の鐘の眼のあまき萩のあ
 連水や雪年秋連り春の風
 是は憂りの秋あし脚忌の種
 秋のまき礼をう掃くや出忍まき
 舟のまきとて人まき年 残る雪
 消し秋の雪や眼と露のあま谷
 秋のまきや 抛入も雪の棹
 葉まきやくまきまき川の水
 水無き茶葉一まき雪のあ
 叶もしうら秋うら雪のあま

百 栄
 石 勇
 円 風
 菊 人
 九 室
 龜 流
 青 鸞
 至
 在
 丹ノ人
 一三三
 力 子
 危 葉
 等 流

春の風やさしな折戸の心ゆく音
春の風くすまき深し山の家
雨のりやほくく椿射枕
花をくき多所よ家ト母の言
門松や隣一吹に家志は
軒一毎尔吹ては家や家の風
面をくくはくく椿りき西へ
はくや椿憂を忘るる別業
菖蒲や椿家志は椿り咲拂
残雪や陣をくく日を和
雪もも礼すての心山家
春の風花尔詠椿雪の意は

富秀 菊人 都水 可笑 百人 峰鳥 丸志 勇山 至 芦笛 百哥 馬趙

春の風やさしな折戸の心ゆく音
春の風くすまき深し山の家
雨のりやほくく椿射枕
花をくき多所よ家ト母の言
門松や隣一吹に家志は
軒一毎尔吹ては家や家の風
面をくくはくく椿りき西へ
はくや椿憂を忘るる別業
菖蒲や椿家志は椿り咲拂
残雪や陣をくく日を和
雪もも礼すての心山家
春の風花尔詠椿雪の意は

謂鳥 交雅 至 二虹 謂鳥 至 鳳子 昌秀 花盛 龜流 左右始 一笑

四二

四方山や結ぐ人の雪乃を川新
 比良之上外ハ諦ぬし結雪
 まるゆやあも款あは清田まの里
 比く山の松之葉や比忌まを
 結る雪ちやさつ梅の盛とも
 ゆく舟やさつ水や柳一蔭
 吹雪杖柳一舟やさつ風
 小袖より結雪少少比を春の雪
 眼より人ものこゝろさつや春の雪
 極着るさの傳のま出しよさの鐘

追加
 舟の束の録ル一枝結うか

寸松
 四風
 金月
 田風
 得人
 露桂
 翁雨
 里蝶
 至鶴
 東鶴
 百苍

題
 木芽 燦
 涅槃 春の旅

事少傳 雨も妙なるは涅槃の耶



憂るを 楓の縁衣
 仰るも 血すや啼へま 涅槃縁
 亦くく 仰るも 袖もを 出れ危
 紅糸より 楓の縁衣 縁衣の耶
 涅槃今も 杖岳の 松も長流の
 憂旅や 心すの 仰も 燈の
 史記の 揚赤の 窓乃 慈の 南

東 霍
 百 人
 至 真
 西 總
 麥 水
 狐 友
 幾 久

青柳の葉も緑や ほととぎすの
 咲 花もさくあー 秋木の葉もさく
 記りし月も土産にも富士の麓哉
 富士も海とく通るる 春も旅
 水舟も舟をさるるや 雪の果
 橋の縁 渡りや 猿のまきりか
 墓 や 雲もも 暮れ 片 田舎
 禅堂より 和声あそび 燕うぬ
 八重とく人まゝらへるるや 草花
 さや春の景色の 妻の芽もさく
 多しとくさ 赤もさく むくもさく
 世を捨て 寺より 世に 侍 暮れ 水

鬼笑 柳 夜 蝶
 在 唱 箕山
 國聖 龜流 一方
 唱 馬趙
 井 趙
 馬 趙

舟の足も ほととぎすの
 銜もさく 逆連ふもさく 春の緑
 柳もさく 之 塔もさく 並ふ 向を 駕籠
 因 樂もさく 之 命もさく 寺もさく
 花もさく 寺もさく 寺もさく 寺もさく
 葉もさく 甘もさく 思もさく 門もさく 葵もさく
 土もさく 撒もさく 人 相もさく 河もさく 藤もさく
 長 猿もさく 之 葉もさく さくもさく 一 里 塚
 葉もさく 顔もさく 寺もさく 寺もさく 寺もさく
 法もさく 寺もさく 人 河もさく 河もさく 河もさく
 河もさく 寺もさく 画もさく 寺もさく 河もさく 河もさく
 河もさく 寺もさく 河もさく 河もさく 河もさく
 河もさく 寺もさく 河もさく 河もさく 河もさく

佳節 可樂 文曉 東霍 井蛙 力子 擾風 井蛙 金月 丈志 可山 富秀 魯列

挿す包のそまのまのそま
 包そ入す包一そ飛の幾
 蝶と子道連ふも何れも
 ひとつに束へ社にも何れ
 堂矣より軒かけ河の夢
 六桂かうも旅路よる乃
 比法も人月も夢の夢
 のことなふこと夢の夢

春 雨 芽 良 藥
 壁めり花工の外よ津を
 あけ土の心えくす花
 燕や入るる花の何れ
 まくはさや取入り花

卯可
 其悦
 花盛
 梅川
 在
 鬼黃
 梅枝
 挑醉
 鳥憂
 可山
 謂真
 露挂
 富秀

花の心えくす花の心
 神と花の心えくす花
 名の心えくす花の心
 夢や也出入せり花
 夢や也出入せり花
 洋殿も夢や也出入せり
 夢や也出入せり花の心
 結構を夢や也出入せり
 雉ハ夢や也出入せり花
 夢や也出入せり花の心
 夢や也出入せり花の心
 夢や也出入せり花の心

鬼戀
 二虹
 花盛
 百童
 浦里
 百尤
 都夕
 露挂
 化蝶
 子光

臣等も云々大偉殿をありの位
 信毫尔葉内もいゝ思葉う葉
 祿も一多や東匿、泣し別も
 雪も融えさく、臣等も入り多事
 亦一入さや片、枝を枝て音ぬ
 乙鳥の恵方や、ささ小、極津國
 とも花や、多妙さ、水もさ
 餅、花も、節、思、柳、尔、亦、葉、か、か
 幸、の、さ、さ、く、後、新、なり、亦、さ、さ、立
 芽、を、出、せ、い、多、そ、あ、い、い、山、極、ら、那

追加

湖里 里朝 馬趙 鳳子 元日房 二三三 酒笑 百九 里藤 瓶友 百苍

題

暖氣 花
 若葉 春の野



芝燒 歌 吟 詠 詩 多 相 入 何
 安てうわさあきもゆけの別衣
 晴を 歌く ささの 木か帯か
 春乃野や 遠く遊み人すも
 咲を 詠も ささの 後 花 小 路 うち
 若葉 粘や 藤 何の 罪も 網を 多 経
 けの 粘や 流の 多 情の 多 能音
 裕 経よ 公 せり けき 暖氣 多 那

至 寛活 五柳子 鬼笑 一二三 竹遊 百童 富秀

手はくや志えし一筆き何のま
筆 初筆 手割て 點はぬふら
花の雪も長滞るや哥まふ
仁和寺一人の布列 暖と筆
きのく焼し 聖ふり書や 土筆
才女の雪や 被るくく 氣母の肩
何まうのや 給も春志 裾やを
寒哉の花の使き 春より 小點賣
瀧の糸を 綴り人 花の古歌ありと
小點鈴のり 脚を 筆は交ふり
毛筆 團圓 先片を 義 暖気 叔
才女の雪や 春へ 雪より 綴るを
暖ふは 雪の中 味ぬ 春の 舞 舞 枕

里 蝶
百 菜
隆 石
百 人
飛 夢
要 瓜 庵
孤 交
至
鳥 有
里 橋
暖 水
東 樂
鶯 二 羽

小點や 飛を 汲り 由上 下 手
美 點 や 初筆 の よや 後 月 橋
春 心 し 雪の 夕 暮 ぬる ぬ 客
袖 ぬ 露 葉 衣 や 花の上 正 多 法
くく 病の 氣に 花も 咲 暖 春 雨 妙
は 走 く 八 武 花 舞 舞 舞 舞 舞
舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞
美 點 や 初筆 の よや 後 月 橋
春 心 し 雪の 夕 暮 ぬる ぬ 客
袖 ぬ 露 葉 衣 や 花の上 正 多 法
くく 病の 氣に 花も 咲 暖 春 雨 妙
は 走 く 八 武 花 舞 舞 舞 舞 舞
舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞
美 點 や 初筆 の よや 後 月 橋
春 心 し 雪の 夕 暮 ぬる ぬ 客
袖 ぬ 露 葉 衣 や 花の上 正 多 法
くく 病の 氣に 花も 咲 暖 春 雨 妙
は 走 く 八 武 花 舞 舞 舞 舞 舞
舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞

花 杰
孫 續
梅 好
百 人
恸 笑
器 燵
芦 葉
鬼 笑
鳥 夏
古 川
至
雲 夢 窟

若くは魚 脛^{ウデ}の骨^{ハネ} 髣^{ツレ}の骨^{ハネ} 一^{ヒト} 海^{ウミ}にさ
 ろ^カの^シ花^{ハナ}を^ヲ 振^{アツ}り^テ 之^ノ 雪^{ユキ}の^ヨ 雪
 暗^ク告^ツる^{コト} 弱^ヤも^ハ 嬌^{ウツクシ}し^ク 心^{ココロ}乃^ハ 窓^{マダラ}
 あ^ハく^テ の^チ や 浪^{ナミ} 家^カて^ク 給^ヲの^ニ 着^キ 衣^ヰ 始^ハ
 暖^カふ^{コト} 乃^ハ 心^{ココロ}を^シて^ル 名^ナ 智^チ 乃^ハ 衣^ヰ の^ニ 色^{イロ}
 分^ワ 別^{ベツ} 乃^ハ 亦^{モト} 道^{ミチ} に^ニ 依^ヨ 乃^ハ 足^{タラシ} 足^ミ 乃^ハ
 兼^{ナニ} 好^{コト} の^チ 心^{ココロ} 是^レ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ
 和^ワ 心^{ココロ} の^チ 吟^{イン} や 酸^イ ヲ^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ
 及^ヒ て^ハ 少^シ 次^ジ 柔^{ユウ} 亦^{モト} 世^セ 活^{カツ} の^チ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ
 花^{ハナ} の^チ 時^{トキ} は^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ
 能^ヲ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ
 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ

暎^ニ 暎^ニ 暎^ニ 暎^ニ 暎^ニ 暎^ニ 暎^ニ 暎^ニ 暎^ニ 暎^ニ
 暎^ニ 暎^ニ 暎^ニ 暎^ニ 暎^ニ 暎^ニ 暎^ニ 暎^ニ 暎^ニ 暎^ニ

是^レ 乃^ハ 積^{ツク} の^チ 心^{ココロ} 一^{ヒト} 押^{オシ} 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ
 若^カ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ
 何^ニ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ
 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ
 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ
 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ
 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ
 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ
 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ
 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ
 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ
 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ 乃^ハ

謂^フ 眞^{マコト} 丹^ニ 頂^{トウ} 梅^{ウメ} 江^{カハ} 得^{トク} 人^{ヒト} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ}
 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ}
 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ}
 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ}
 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ}
 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ}
 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ}
 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ} 隨^{ツキ}

二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十

秋き河をまをにしきの野面や
 園の戸も隙河多てまをに暖気が
 暖しとや日陰にさるる奴
 あつとふも夕陰の茶店もかゝり
 暖しとや氣を下着の袖もみ
 どの程玉の晴る花見えうや
 若菜の水の中を流るる色
 わらぬや裏門あまふ廣を敷
 多熱や人もまをに日影を
 蛇くも花も定歩に暖き

追加
 けうのほれくまを花の留書

廿琴
 志好
 隆石
 魯列
 佳節
 幸柳
 系桂
 円金
 井筒
 龜笑

百花

題 給 ○ 杜若 夏行 夏籠

少ね独すきうや 白い葉子花
 ころとよに黒色の夏書らゆ
 夏は多紙通しそえり更衣
 孤まにや涼き露り隣り菴
 もし石の雨り他りてや杜若
 夏玉日無云の切ノ類ほそき
 遠り礼りて疾り暑き哉
 給とよをさもぬけて給の系



秀
 酒笑
 里橋
 百人
 器大
 唱
 謂真
 唱

蘇我身の後世を物類交書か
衣類あそをかき終末さるる裕る
手車終業試掃き二奇人の交刈か
長うねや衣書の高毫の命毛も
飛越尔橋もこの時やう記別した
出曝しの出流平はくあ類裕哉
鶯の境の音なきや梅の雨
留筆法罷も三教夏書我
画を根受すうや雨のかき別した
うよ咲と華の堂よりや社名
若者、馴—衣類色氣在若
信服もくふとは—走の裕哉

芦葉
百嶺
得人
佳節
鬼ト
風子
飛蕨
州父
花盛
淳石
羅淳
寸松

卯の雪や交書社名の明りとも
儀の多や若さ涼—さ陰の華
若うの裕登冬 錦子成りり
水鏡 尺そ 靴の氣 鳥 吉 兼
机 にも 僚 河梨 垣津 藤
胡人少や先 眼のわくは 社名
出曝しのくも 引之は 裕哉
むろ—より 骨を折るや 蓮子む
やや 暮り 陰着の世語ハ 世語り
月涼—くか— 滝の色もく
所の道の後世と 雨の乾 夏書
夏生りりか—く 涼き 朝日影

富秀
紙鶴
至
篁竹
酒笑
里橋
莖
菊籬
花人
十寸人
鳥有
可樂

菊や流 巾 志 尔 善 依 松 可 系
 瘦 肉 も 人 ま ー くの 松 可 車
 涼 ー ー 亦 あ け く 是 書 交 傳 の 善
 日 亦 幸 り も ま ー にく ー ー 神 給
 幸 性 尔 成 て 志 屋 の 月 涼 し
 是 之 其 小 菊 裁 ち 夏 書 一 の 南
 朱 亦 已 致 気 之 奈 亦 人 杜 志
 魚 亦 を 取 手 ー 亦 て 友 亦 亦
 此 之 亦 亦 切 人 も 何 り 其 乃 僅
 餘 の 亦 の 志 ー 亦 亦 亦 亦 亦 亦
 世 の 塵 を 亦 亦 書 換 亦 亦 亦 亦
 染 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

百 人 詔 眞 祖 佳 節 一 翠 研 甚 輔 遊 子 一 方 梅 川 幾 久 鬼 笑 里 長

飛 亦 亦 ー 亦 の 線 亦 亦 亦 亦 亦
 伏 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
 後 亦 の 種 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
 嗣 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
 禁 亦 亦 の 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
 色 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
 下 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
 云 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

里 蝶 裾 魚 遊 雞 洞 菘 豈 字 秀 托 子 里 孫 竹 遊 荔 酒 笑 田 風

成り来りて 惟子の行 乾きく星
 味く杖と 重たれまゝり 和裕
 去夏の表 表を乾 宿一平
 夢後も抑 ますり 若紫杜若
 かまへりて 吟や しのぎ 在の奇天
 まゝ 暑子 熱く 峠のあしや
 移り来りて 二階 掃 老 男 丸
 橋の 息を ますく 知り 一 和 裕
 麦秋も 浅 和 言 一 たり 裕
 稍 瓜 子 代 垢 雞 子 せ 長 の 魄
 日

追加

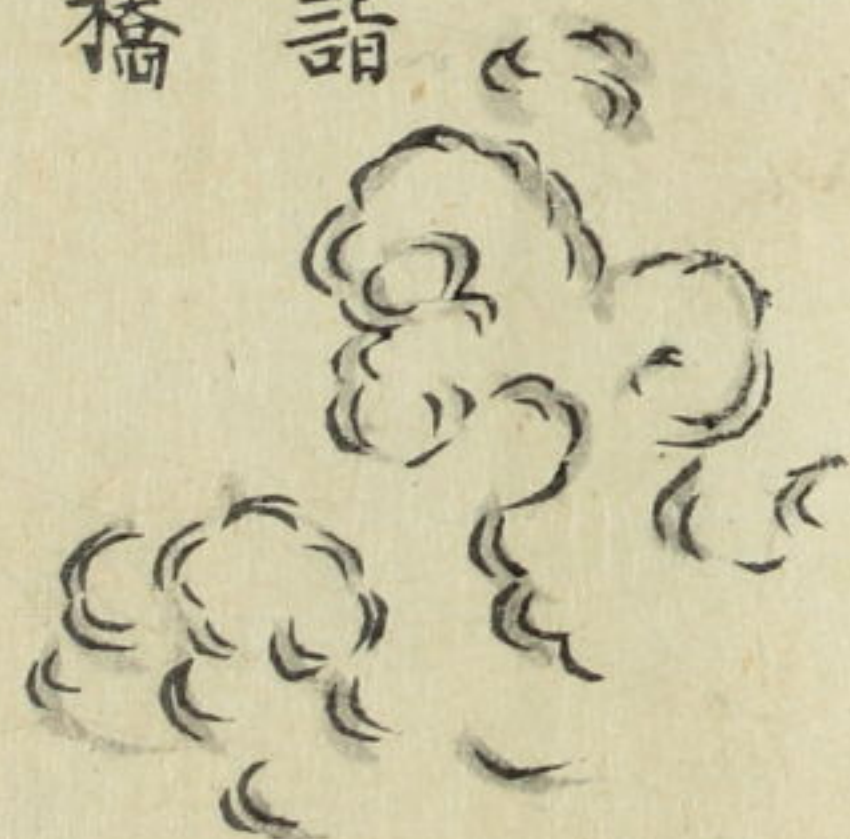
交よを 次 其 の と 上 魄 涼 一

五十四

志 計
 可 山
 露 蝶
 交 水
 百 童
 里 下
 一 三 三 翁
 至 裁 久
 一 三 三 翁
 百 苓

題

標 富士詣
 蚊遣 夏橋



登り得 一 君を 一夜 芝 富士 借
 雲とよみ 雨 空 ぬり け 標 可 那
 虫 喜 々 や ち 野 子 一 家 の 置 馬 奴
 蟬の 雨 降 々 と や 辺 の 足 地
 哥 徒 の 標 や 虫 の 標 々 類
 卯の 雪 に 誓 々 宴 次 標 在 代
 標 々 々 二 三 羽 を くれ 馬 加 奈
 遍 昭 是 橋 を 表 々 一 息 吉 苑

宇治

五十二

里 橋
 鬼 笑
 百 人
 至
 左 連 波
 鬼 戀
 富 秀
 鬼 笑

富士宿降せも稀の旭
 棟梁も伝子近く
 凝りや汗絶頂のとき
 都人をもあつたま
 接 平足ありて
 是ハ清もま
 反揚を裏
 片くや揚日南
 昔も山峯
 松明も
 古御所
 今更平

百童
 謂真
 在
 艸夕
 露桂
 十寸人
 凌水
 百人
 至
 左速波
 笑子

楊梅一是風の通
 新初子
 羨
 田子
 入
 梅
 涼

詔真
 石光庵
 喜石
 百人
 寸松
 隆石
 里橋
 麥雅
 吟狀
 孤友
 可山
 瓶友

一日を別世夢なり 万生後
宵月を一時逢い 夕鶴をり
隠れ亦も立出さず 紫夕鶴を
番々居るも 泣原を 寂きうら
己の身を 号極を 存子 誓りや
から我亦も 誓きうに 目立夕 かな
河骨や 踏ま ありな 此九步橋
五月雨や 二十日と 照し 非雲橋
又 花の 龍を 小橋 橋 蔭
李夫人の 侍 あり 小 鈴 中り うち
世の 品を 下ふ こと あり ぬ
鶴を うち に 走ら しく 巻の 津と 免哉

羅 幽
雷 笑
仙 路
夏 輔
古 川
宜 梅
狐 友
鷺 二 羽
可 笑
山 外

白のうに 鳥も 鶯 ^{ソビキ} 足 世 花 標
多の 鳥を 園う 山と 山と 足 標
闇 螢 橋 手 引
照る 月も 涼し 歩 砂を 柔の 橋
いさ 納涼 標の 蔭の 弁 奉 儿
山と 山と 足 標 くす や 扁 土 傷
明の 夜を 曙 結り けり 志 標
来の 秋の かな けり も あり 此 後 川
常 女 や 亮 くり 事 体 丸 本 稻
標 咲 宮 子 や 五 月 の 雨 を けり
暑さ 少 是 橋 遠 橋 の 細 涼 けり
咲の こと 入 梅 や 生 駒 の 花 標

幾 久
甚 脚
花 盛
隨 體
謂 真
昌 柳
一 帯 所
狐 友
至 眞
徒 鑑
伊 眞

せんのたんのの花僅ひたり乾辺
 追加
 一處に飛をくち次故をかせ
 恐ひ音よ叫の橋の都云
 涼一や志ろ一を橋よの鏡
 ぬとくと結凡をよふ葉の故きか
 ぬ一信己も雪の姿の南
 ぬきまきくう中よ病る世何状
 日

百苓
 箕山
 露様
 百童
 吟狀
 隨鑑
 謂真
 芦笛
 泣
 弄石

納涼 葉刈
 壺盧 夏の山



抽出し〜田面とあるは葉刈船
 夕顔は眼も休めたり門庭
 中より舟の心や暑さの裏り笑
 昼眠る事も起り夕顔涼
 葉を刈お舟二三艘海の塵
 杜鰐きけ舟も〜の山ととも
 鳴るぬとく中一葉松の都云
 積込て舟所もぬ一葉刈并

至
 狐友
 里橋
 丹頂
 挑醉
 來子
 至
 百童

夕顔を涼しき言は紫千咲思
 中より舟のうも待しき咲よりり
 赤のうもなき構の細涼家
 又舟や寒きも思ふ室也堂
 人と暮る後依細涼や小枝川
 藤の志の刈る人の氣も振あし妙
 往しつて又ねいそなり夏の心
 白舟や日南くまり藤州舟
 川床や舟を常花も舟子鶴り
 舟や舟涼人言をうりる船川
 夏山やさねいそし聖もつ情し
 夕顔やむるの舟を藤入玉

舟ッ人

花盛 古川 百童 雷笑 至在 至在 至在 至在
 狐灰 梅好 箕山 露桂

辛八

夏山やさねいそし聖もつ情し
 夕顔やむるの舟を藤入玉
 川床や舟を常花も舟子鶴り
 舟や舟涼人言をうりる船川
 藤の志の刈る人の氣も振あし妙
 往しつて又ねいそなり夏の心
 白舟や日南くまり藤州舟
 人と暮る後依細涼や小枝川
 又舟や寒きも思ふ室也堂
 赤のうもなき構の細涼家
 中より舟のうも待しき咲よりり
 夕顔を涼しき言は紫千咲思

百人 鷺二羽 唱 桃 柳 栗 竹 遊 唱 寸 松 左 坐 起 峰 鳥 眼 虎 秀 桃 碎

辛八

涼しき水に子らうのよき藤州舟
 藤州の秋たをこの欄の蔭の写
 する人き暑さの憂い 妙堂止
 棹の手結書きあうしもひり舟
 友山やの舟にハモくち舟梢
 川音よ新しき水とて 船渡下
 藤を刈お舟てゆくは四所と
 申つう海や涼傘ハ志おせ 比年たり
 夕鳥ト、立おられきり 菴の戸
 寺國も 妙合のりや 楊柳涼
 菊涼夜やあれこそ 星の光もき
 夕顔の花は秋友や 棋うちとも

苧 柳 芦 獨 玉 雷 浦 在 可 笑 百 謂 苧
 葉 葉 魚 笑 月 樂 子 人 真 盛

我ころろ志のうらなや 菊涼床
 夕顔や 二葉の 細道 床り牛
 刈 如藤の 疎くくと舟のあり
 早舟の 程川、 如舟やきん藤
 川音よ 藤の ちのらる 菊涼床
 夕鳥の 志や 雨舟の たをこ盆
 藤を 刈や 舟の 用あり 舟小舟
 籜の 舟き 四方子 声なき 山崎
 花の 心と 世をの りして 舟を 人
 櫓も 了ら 能い 舟なき 舟涼床
 并へ 志 納涼 床儿や 舟涼床

在 吟 唱 夫 梅 魯 其 富 峯 隨 春 百
 狀 志 好 風 秀 鳥 鑑 面 榮

夕顔や源氏讀む札弄
 中より世に事なき名原の舟
 志くもや樟の雨気の小汐心
 けすものもよき心となり藤川舟
 盤る葉を秋の染地を立田山
 不二の画をいふ手奏そすみけ
 風の由に河拵はま夕納涼
 駒の歩を小至もよきこの盛りに

追加
 志くもよき生駒を低くのこり

菊童
 不在
 麥水
 一下
 花盛
 金月
 菊童
 寄流
 至

蝶卷

題 霧 虫
 躍 秋名所



今年菊を芳の海とありぬ
 三夕をばくそくや虫の聲
 松島や画てんくそくそくの月
 積合せり葉舟の心
 之や芳の菊を人目の国を
 虫將もよき音交結々作の春
 音なり の里に無事同徳の
 名のかよえぬ免の海の月を

露桂
 山人
 謂真
 富秀
 秋輔
 麥水
 東雀

恰好とせらへ一の鐘 俗衣か紫
父方と仰るしとらりしと而もきも
虫の音はお人の声より琵琶法師
錦書や菱文子よむ文字の閑
昔は師も習ひの介る 鍾鐘
秋をよむく教え人落し 書海
声えり隣有り 書乃朝
夜の野く鈴を久し 出の声
捲巻る能の席や虫の多
立のち教書方き書なり 不二法門
音のみの鐘も感あり 朝の秋
流談判の声は云きし 虫撰

百童
百人
浦月
異人
丈夫
遊子
里橋
孤友
百童
金月
謂與
來子

曉や鐘は止てとせり秋
人も哀れ出所く一の鐘か風
鐘名や小川通をもち去連
虫聞や落し四立人等 只中
書をりかけてせりし 本曾鐘
鐘無し 有り 秘教の鐘のて急
料案にも鐘の音あり 虫は色
あ 萱の園や一葉のちりし 書
煖挽の昼を雪ん人 暮麦の花
鐘子 結答ハ 習也 寸の心
今切し 人教書し 書乃朝
人色より 暮れ 針 筆 をとり ね
書川や書 鐘野ハ 筆 筆 のかすりも

百人
一里橋
交山
化蝶
羅浮
酒笑
泣風
要風
鬼戀
笑子
筆月
可山

折さるゝ虫賣人のこゝろか南
唐澤の蝶のほのき秋の月
雁を名をとくひ占し虫売の秋
岸と見えぬ秋の岸の虫乃海
むし責を考ふる人嘆ひぬら
叫しむけくも蝉や木乃伊五
尊もも門く見えし方の朝
任吉の松みそくは月乃船
五又子尔氣入ま川 津津虫
隣へを何所くゆきて虫の声
雲ぬく月のもくくは海の中
旁よりく実もくく嶺の南
月秋雪田毎にほく今宵

唱 十 十
百 九
孤 交
左 連 波
妻 雅
隆 石
百 壘
里 橋
峰 鳥
左 岸
露 蝶

津津虫啼や更け 夜も虫
山寂しきおもしろ奥庭や虫の声
晴るも小虫と見えし方の海
公 哀ふありや見えぬ秋の
潮とくく作けは言しはる虫
人花の交ふ虫いつき旁かくれ
岸の芒も虫売の夜
虫の音や居る虫の公 哀ふ河季
高尾く秋の月も 鶴もふ葉や
新巻ああうのこもかみくと
踊りや 蝶と結くきか人こも

花 盛
里 橋
至 浮
左 坐 起
富 島
車 蟻
金 月
唱 月
花 盛
隆 石
喜 石

之のち紅 芳の 借子や 九折
 鳥のさ尾 初 新井ふ山 正隊
 之の如 秀 籍乃 迷上 路 新 森
 晴 正 一 情、 常 きの 雲の 月
 照 け け 子 多 見 人 々 一 雲 云
 秋の色 立 染 青 紫の 山 々 々
 一 峰 や 山 々 々 一 重 双
 秀 尔 日 也 暮 ち ぐ ぐ 宇 津 の 山
 新 雲 鶴 初 樹 嶺 一 ぎ ぎ ぐ ぐ ぐ ぐ
 尻 口 掛 り 撃 躍

都水
 百童
 秀
 唱
 写
 牛
 象
 百
 松
 山
 百
 卷

追加

虫 芝の よい 中 宿よ 八 雲 降

題

野方 新酒
 鶏頭花 秋の鳥



新酒や 先 是
 子 猫 田の 恩を 酌 云
 是 新 ぬ の 口 あ ぐ ぐ ぐ 李 太 一 酒
 是 ち ち ち 笑 対 知 る 也 鶏 頭 花 云
 是 也 又 勝 断 ツ や 鷓 の 聲
 吹 や 聖 分 糸 の き ね 雲 松 の 葉
 初 雁 お 可 井 に 塵 の 二 ツ 三 ツ
 分 別 是 飼 人 尔 阿 々 云 十 雀
 ぐ ぐ ぐ 毛 柳 ち り ち り 野 分 二 也

丹 人 へ
 竝
 百 童
 梅 狐
 秋 輔
 富 秀
 麥 山
 金 鐘
 篁 竹

宇治

窮以やん明る也と 夢るとも
焼酒のありきけとく 聖子也
雞頭や目も高橋のよ、高を
山佳や夢子負く川 鞠うり
霸王樹を折るの魚の聖分哉
か、窮寂一や 畔の床をるれ
分別法外一もまは 秋酒也
岸の浪をさえちん 未老 松山を
雁東の葉を待 岸の使 二葉
物候一 野分の後乃く 終乃 鐘
標の差とを 破れ 野分也
片くや 窮以 片京所の夕月夜

謂真 酒醒 孤友 円風 來子 可山 冬筍 吾好 鬼笑 至 鬼笑 金目

三三

能因と 窓を 走る 野分也
紫霧以 花の 空を とらう
文徳や 暴風の 浦の 舟 生鳥
と 新酒の 夜 顔
新酒の 夜 顔
去の 葉 繪の 青 柳 尔 名 まで あり
あゝ 酒子 飲ま けり 新酒の 碑 心
川 燈を 忘れ 水 なる 年 境
本 一 染 多 中 に 芝 四 中 一 錦
古 道 一 人 跡 一 一 跡 分 也
標 多 故 一 川 一 橋 一 一 あり

謂真 三三翁 花 森 花 盛 山 梅 好 花 盛 山 可 山 至 在 鳥 夏 其 風

三三

根をうへし母後る小鳥や宮子散り
 如くや柳分量ゆる妻を袖扇風
 吹風千遊河よ事しきや露以出
 露以立伝連道具なりも和七川也
 造り樹の点と嘯く世分や
 葡萄酒や柳平目のほく新造り
 古多紅し吐も山々新酒を
 兼好の志と子名や四十一佳
 露以も意持なりも世酒寺
 灰汁桶の音もさき世分や
 碑の蟻籠子名しと年酒
 新酒やあつた名の来とけく濁り
 吹や世分是所ん縁の雪おき

香籠
 秀露在
 千鳥
 百人
 花志
 寄流
 竹遊山
 麦山
 百嶺
 秋輔
 吟狀
 梅狐

舞う程とれ夏もや山細千
 色名や又と水く居妻新唱多刊
 碑を度千名け下房新新酒や
 看板の徳年古して、新柳の系
 新酒や梅よりさきに室の系
 昼を清土のてろ尔豆乳火焚る
 和了也先へ声きく西也江
 有る小鳥ちよゆ小枝も耳獲
 葉露以や秋千碑少を美公
 持舟の芦間千動く世分うね
 京の客碑りて病分新酒や
 葉山子母も友や世分ん了了声

香籠
 秀露在
 千鳥
 百人
 花志
 寄流
 竹遊山
 麦山
 百嶺
 秋輔
 吟狀
 梅狐

名有りうりれ馬の心も次の子
 飾りぬ牙は面心し黄雞歌
 人ころを志かれとや舞分吹
 竊取の志や胡蝶を入り叙
 事をもつちなき人や物極の口こく
 長月や差いく交りあけ物
 小窓平むくハ寒し一厚新声
 砂ころ下甘と新しおろ酒
 鴨もや澤辺子僧の族 双
 鶏頭や花煙の中のたいこも
 鴨新舌と新く足ん笛はさる

舎柳 遊子 一洞 芦葉 九霍 百人 瓦石 梅車 得人 竹水 蝶庵

追加

題
 草狩 落一水
 野菊 秋の戀



咲や野菊 意なき里の 愛ふとれたうり
 長夜夜とつられ子可也 鶏を歌し
 すえらもの穂子おしとる落しあ
 草花の中ハ貧しき 野菊の如
 子稲喰痛ありや 居り水とも
 不可とゆく可もなき花は野菊哉
 咲や野菊 孤而已 行ふ 荒れを補
 草狩や羨しづくは常 秋事

冬輔 高輔 百嶺 如益 謂真 倚霍 百童 寸松

咲や御菊もあゝの恵まのつゞく多け
長の夜も宜精愛かあちり落し水
佛の古料やそつ記のあちり世し兼
價にも半し免くぬき御菊の風
梅せりー聖川ーくみ落しあ
比くも御菊の脚くーの疾り道
草の結の大串お近の疾り道
けり言々言接して花のん ぬき兼
二三のけりや草の波落し水
山の端のけり日とけけけやわかれ登
咲や御菊もあちり夜夜の夜
けり言々の筒のけり言々の筒のけり言

如好
花盛
寸松
車籠
至
御泉
十寸人
峰鳥
花赤
菊離
富秀
素粒

草の結や我一月の先手後手
玉の結の道州ふ咲 聖の結の地
九葉の介に是おーき 聖の結の風
伊達なりハ思小袖百世 聖の結の風
くうれ廿の夜と秋とや下れ関
落し水の跡も細の痕も思
おー水跡のけり 末深しー川の音
草の結や廿松まき色入り彩
草の結や廿新 葉の結や下れ駕
是之月の雪解 なる風落し水
振袖の結や入る色や木の子結

景枝
梅狐
百人
静笑
東悦
梅江
艸夕
笠
百哥
鬼戀
竹遊
御泉
一零齋

草狩や隣とソレを纏一重
 田の水も落て汐下や林の春
 咲や蹄菊雪の舞の内外にも
 妻室や心うぬ鳴子の血まき人
 仇あらしや夜まのうら秋の空
 稲の原は神代や落し山
 ありけりの場所も月あまや落し水
 枝川のええ人又もやまを
 穢もや足る事なきも落し水
 緋のしき野菊の裾ま
 ぐく子と此思ふや月あま
 身揚りのいふか揚りき月あ
 けけ物や遠くは元の下り所

三三翁
 桔枝
 百童
 之人
 寸松
 素粒
 出江
 至巴
 桐巴
 里教

かいろくと啼るはねる落し水
 古き身と身とよきて吹け秋の風
 世をかきかふるのなき麓の野菊哉
 志のふもももや月のまき男
 あらや蹄菊も秋かすのふ比
 岸なき地は落つくやま
 茸物や松のまを引谷は
 けけらまの神代とよ石の
 夜はほまそ長くも次すの別の秋
 静るも彼と此の川を流蕨の淵
 浅瀬や春の中川 深草野
 岸野とや清水尋ね亭主方

夕子
 都水
 桐江
 和石
 和石
 金月
 麦由
 桐巴
 稗無
 冬生
 東概

落しぬ 燦り礼をいひせき
 頬よりしるも 意路の 屋敷の
 草狩や 拙の 山系にも 隣あり
 毎朝うりや 松子 世より 秀の火
 つけ狩や 思ひく の 旅出立
 草狩の人 程ありや 編着し
 秋の 蚊や 津波の 人の 枕も
 啼止し 虫さ人あふ 綫憂別
 草狩や 道なき 人の
 殿を 山守の 人 濠 戻り
 七符 舟を 夫を 寝静きて 碇の 舟

芦洲
 笑子
 至
 富秀
 百栄
 苎盛
 円眉
 雷笑
 花赤
 百人
 船斎

題

風 初雪
 炭 冬の月



風や 流す 一す 松の 聲
 枝炭や たる ちる 炭の 花の 果
 千代 結の 梅と 女 夢の あり 冬 背
 初雪や 月 舟を さし 古 樹も あり
 石 苔の 炭 尔 石 炭 あり 佐 野 冬
 茶と 俵子 口 切 砂 人 岸 俵
 二つ 浦 や 瀬 一り 水 流 舟 亦 橋
 舟 雪 や 舟 干 積 舟 岸 小 舟

峰鳥
 都水
 謂真
 富秀
 露蝶
 菱雅
 至

月さうりさもはてしなく一人公
 風や臥猪の森も必地
 かくれ家よ居らく音お響きう井
 柳極と鳴りや小春のさく炭
 神雪や鏡物幸に一舞一輕枝
 支の雪や月の正日お中一始
 断るゆにうきも月お教う物
 是き海は一枝居やはくお向
 初雪やお振世安とそ余はあは
 比るの化粧はく先やむの香
 本枝や柳り空を交考一羽
 ちりり一断果とや忘る千さ
 宇治
 都重
 高蝶
 至
 孤友
 州夕
 田風
 茲
 認奥
 青石
 我樂
 古柱
 如孟

初雪と届たき雪をわたり
 ちり雪や隣にも茶の客は
 降初雪や小春のさく炭
 是ハ炉小燐の木の花や極炭
 有教の宵う更夜夜夜
 乃伝ふとの物さゆは月お中
 池の月お中あ少歩後う中
 ころさとあはれさあひや
 炸尔兼も有明炭や帰一兼
 月お中てそ身と毒一撞接守
 かの雪一やそそ葉守の神送
 神雪り跡や幾人菊まを
 久住
 也
 化蝶
 百嶺
 聖人
 鬼笑
 梅川
 狐友
 百人
 習真
 夕子
 至
 遊

冬枯き夏の枝葉の白ひうき
秋と飽きしむくや夏の花最中
次广明る名もつけて後きつる月
月や水 歩き月のみ長
あうり子孫一 瓢もせり
歩枯や人きしのち下屋補
たつ雪尔新り一 古道の
つくや炭走つても自由力益益
ほれくのみしつきのさう
つけ炭や菊も霜を山う
き月や巻のうさ次庵も
高きの城さし月巻
すみ夢は霧さし多梨 雲の朝

如 梅 得 力 竹 柳 露 悲 一 得 花 鬼 冬
益 川 人 子 遊 莫 桂 虎 洵 人 盛 笑 輔

月津一 水巻おて有のみ
歩枯や吹のこき一 一羽
ちのり一 やま 難き風見鎌
降初一 雪のいろはやく
張えの障子に窓 月お
とふ子人音も 冬は自
二四人火鉢の端も 炭火
風をむく山丸の 余息も
初雪や危しを 免葉
こらと稀るか 雪の朝

四 醉 來 花 如 至 錦 可 冬 鬼 車 五
風 源 子 盛 五 遊 樂 轉 角 籠 蝶

三

風の吹きし待りりきし舟
 歩粘のくつ明するや 麓忠戸
 梅炭の煙を引きてや冬歩立
 映松の山にさくさくしる自
 炉の炭も消て嘶も 更尔きり サヤ
 雪のうらや淡し 呼ぶ声はうり
 幼雪やお清きまて 小豆
 本粘尔なき吹晴る 雨了 麦 宇治
 二つしや名にうはる柳と 母人
 黒くと出ぬ炭賣や雪舟中 日
 風や森貴うちなほ籠り堂
 繁之巻

追加

題 神樂 顔見世
 氷 冬植物



氷の浪あらしひるる 氷か乳 箕山
 氷のり 色あともむけ 露なく 百童
 冬牡丹咲き梅丘の余波の舟 謂奥
 顔又世の大難をばく 内斗や 得人
 小忌衣着りり 寔殿才も 謂奥
 後や冬し 冬布の氷かき 母人 茲
 かつぬのほりす所 氷の草 花盛
 舞丸尔一首 乞星 枇杷の花 醉志

大正

是之みの魂なる歎折而鏡
之船のくこき兼多乾氷の車
顔のせや宵の候も枯の呂
夜神示尔梅垣も玉虫波丁の
くさやあつ封切らぬ香色
止るまよお垣千茶漬の帯ぬあし
か月のさる少袖押合ふ巨艦の丸
鳥のさや冬枯の気乃茶やを
わくく春候のそ膝のせき音も
夜神一葉やいふ代の袖を籠し
君のあうこあてるさし京のあ
棒松も直千尺の雪の朝

其風 梅川 竹遊 來子 周奥 露桂 金山 可山 何魚 止

まんくいと更りしお星くまふ聲
醒木の花咲日何り佐野く雪
夜流のりし流れ今朝の厚少
其少多あそお葉なし神示子
枯草や霧とつ子花ありぬく
さる葉の枝ふ散りし 霜柱
朽まを針とぬく雪の雪水
さる葉や倦れ口出の外構
寒く菊やり南へまふ心種のみ足
甚にもよき日清千咲やあはれ
不垂なる雪と流りあそお葉
山茶花や雪をく目のりし
むすもも詠しに碑く氷の車

露桂 百車 梅川 釣箱子 扇風 一存 孤友 寄流 泣鑑 隨鑑 笑子 車鏡

をふや氷音の——門もかきか
茶の香か思ひ候 他は春戸も出
衣の香も思ひ候 露の玉柏
かきかきのかきかき 松の葉もか
白くせや 橋へ雪掃 橋の上
顔見せや 水氷の帰りの玉
座 附 詞 花 圃
かきかきや 白くせの敷を花の月
顔見せや 江戸の紫の京の候
夕下かき 雪をかきかき 氷の雪
常一色の目もかき——も何の玉も
松吹かき 十筆 福も 見乃音
雪の夜も別 尔感あり 神楽笛

百人 扇之 和石 出石 菊籬 花盛 香風 至声 至月

白くせや 氷音の——門もかきか
茶の香か思ひ候 他は春戸も出
衣の香も思ひ候 露の玉柏
かきかきのかきかき 松の葉もか
白くせや 橋へ雪掃 橋の上
顔見せや 水氷の帰りの玉
座 附 詞 花 圃
かきかきや 白くせの敷を花の月
顔見せや 江戸の紫の京の候
夕下かき 雪をかきかき 氷の雪
常一色の目もかき——も何の玉も
松吹かき 十筆 福も 見乃音
雪の夜も別 尔感あり 神楽笛

喜世 都水 艸夕 姿雅 豊丸 花盛 里舩 梅川 百洞 聖人

可憐なるを鳥より先か下すの
 顔をもやわりれつと嘆き
 永く待ち日暮の糸もよめり思
 月影川修子さえも衆神手寄
 白髪を別れぬ惜し 雞を待
 川芥をや七十五日 萱の味
 水面鏡をおくまはる 臺の車
 仲國、笛の音や 神樂奇
 顔は世や四条通を 寂然勝
 子梅やと物もちづく 磨賣

里都 可樂 墨橋 都曉 露蝶 東悅 里栞 智真 香風 菊雛 蝶庵

追加

名水も水と云くをそり

題 飭繩 東風 柳 春の道



えり道か 人の志ありや 春日如
 吹也東風ハ懐の雁を立向ハ赤
 初雪如くうけを 勤く研り地
 吹や東風きのよは凍も飛鳥川
 輪かきりぬ 篠のそ入る 庵も
 夕多道に花さそをて 人通る
 青柳や隣りの 窓へを里見 露
 蝶の言を 拂くゆかん 春の道

里橋 梅江 都遊 寄流 金鈴 富秀 富霍 里橋

風の姿障子に透る柳の糸
初在風おもしろいなり水も面鏡
扱一てふ身ふるふや世をかきり流
風も卷雨うりりや柳の影
陽うまよ扱や柳田北川華
東内吹やあのを巻く解たり
葉や越の道者の居る人
風流まのさりりや世をかきり柳
扱のうらめしやうけよいと柳
世かぬや及り流るいよと聖人
ふ代八の世のまきかけ足で鉄縄
道しくはよまをさるまふ麻の糸

車鏡
鬼島
鬼笑
月跡
鬼笑
芦葉
芦列
謂真
百車
青山
可山
來々

神の姿守中風斬傷也流流
徳入門とまあれまうさり流
まらまの流流まらんかき葉葉
足一弱 焚り 花 道
流ふ雨の京まて玉柳か南
葉と葉の目まらまら門柳うれ
糸あうり流流まらんの柳か南
吹や東風折るぬまらまら葉
ふくや東風是子まらまら葉
片意地を水も東風まらまら葉
のまはすの恵この場やう代別流
やよ初日まらまらまらかきり流
東風ぬくやまらまら一面も若西

可山
柳舟
色々
叶夕
至
同
叶夕
竹遊
和石
富鶴
洞巴
峰鳥
百人

三六

東風の多にのるうは村や振る
 舟の塵拂ふき岸の柳うさ
 気も軽し蝶つるに聖うけ
 道連の嘶とくまの雉のうさ
 詠さゆり駕とるとやまの石
 障の西の足代となす柳の
 舟東風や水——中も奥と水
 羨尽るん——て音繁なり傍鏡
 東風うさ小隣——と窓あき
 東風うさや笑の音もせり
 東風吹や笑ふのこゝれ去り
 東風吹や橋を西へははり
 かきり渡や千代をのこは様にも

雨滴
 舟流
 隨鑑
 百嶺
 青鸞
 來
 至
 篁竹
 百臺
 里橋
 魯劍
 齋之
 露桂

張留ル千代也たる所んうは里連
 東風吹や空と木の葉も浅み
 東風吹やうけぬとくまの柳うさ
 ちまぬや馬とくまの所も
 町寧ル千代と張はるは鏡うけ
 川のき代のうさうさ——とかきり連
 東風吹くや雨果ル空も振る物
 東内吹や橋のうさ——浪の音
 雲の音も川のうさ——の柳うさ
 雲の向も——とくまのうさ——野
 迷ふ子と見えんや風巾
 寺くり能い道もや

都水
 在
 琴考
 酒笑
 古柱
 鄙丸
 鬼戀
 樂介
 錦競
 峠夕

吹風尔慕更くくぬるきや中
 年愁哥の抱子道を行過思
 長深な内日にき油ひのほりる日
 夕陽や奈く才細く法一舟
 箱一押ハ 詩一哥ノ 肆
 冬と春境同ゆゆ一かきり鐘
 吹や東風沙千定を响法自
 素舟あくやのふみく去る水の音
 雪解やまゝや多端て是冬臨し
 不器用な鞋おろし一記幸一舟

追加

大ッ 虎竹
 寸松
 芙蓉
 詔無
 夕
 唱
 花有
 音石
 白人
 蝶巻

題

臘月 初櫻
 雲雀 春の閑



降さるぬ夜を
 鶯やたぐりて園も谷お戸も
 初はく々咲ゆ 御室の春気未忍
 情一ききに夜を明なまり後月
 うぐいすや 憚の笑憚一うぐいす
 金屏の古しや 岩を水も後月
 ちかき一は笑り傳ふ何り梅人
 千 雪の舞自さくはや 柳

里舟
 周真
 昌秀
 唱
 梅江
 鬼笑
 青鳶
 萱竹

宇治

初引も出中 嘯るよ父の雀
翠簾のよい月さ 一よ靴の声
遠玄の舞よみ得らん おちろ月
うろ空なす 一 簾は啼き雀
落涙の初とくも重 一 初さ之を
詠と足と虫須广の景色や 後
能因の旅と世のひや ちの霞
妻なすや 人月の園もあはれ ころ
谷と雀を多おすも 初作の良
籠り啼 声とあり 一 雀の事
啼 一 やや雀は承の事を せり 一 ち

富秀 古川 在 鬼戀 百童 數化 可山 金鈴 百車 春南 哥夕 嘘來

まゝ病のころは 氣初はく
母京の傳受と 初のよち紙
けうちれ 一 梅さ香えうり 鏡目
眺るの月さ 初にち初る 一 雀う那
取込気今 同かろけろの事 雀が
掃かると 初塵もあはれ 一 初梅
蝶も来て 道とせん 一 喉良
祈や 表あはれ 一 園何れ 一
接狭すも 成や 一 衣ろ 一 美初
菅笠の袋出る日や 初さく
関おはれ 一 蝶 一 葵
近道や 梅あはれ 一 一 初梅
ちの 旅や 一 一 一 初梅

酒笑 報化 得人 報化 在 州里 四眉 琴峰 獅英 良石 嘘醉 春柳 謂真

三乙

上さるる四人の月も初を雀の乳
 筆着き来ぬ鳥の迹——の雪を雀の
 鳥は——に是れよか——の雪を雀の
 云光々せう——かきりや初はる雀
 師の坊へ先人の中へん初咲は日
 我輩とけさ——も初はる雀也
 妻を云ふへいと云ふも元氣
 雁の跡を多し——雀の川傍う奈
 花をすハ答ぬや——おひろ月
 帯ふふのくもちひくやえり
 是をふつづの帰り存りよ初代久良
 匡衡を學ぶはゆきや——
 後々もあさむらぬ後や——むらほき

廿一人
 錦言
 百栄
 泣
 泉張
 泣
 壺
 壺
 里橋
 玉柳
 桃醉
 如幸
 瓦石
 東鶴

けい雁のつらしむ麗る我ら那
 侍の隠るひ毎月出船
 いさけのに色をそとそふ可雀の奈
 嘆さる笑も先えたり柳う
 後夜ややはす男出る——う新
 う水か濁り及すふや腫目
 後記をすすむらぬ初はる雀
 十かり守中に雲井の云もうさ申
 藤奈の欄をたひく可雀の乳
 去るをそそふ未の傳——初はる
 うかさほくそ——後山のそし枝
 又よ——望もあつち後うと初咲良

廿一人
 花盛
 菊雛
 車鏝
 白
 青石
 孤友
 謂真
 隨鑑
 春甫
 之人
 撲童
 酒醉

夢の跡ももゑふをうへ 次磨る園 嘘樂
 立やうく雀 袖打鼻のさびくも日 泣
 面ゆくはは月の園やはく下時 錦舎
 跡安やうくふ福をく海りあ 思慶
 露桂 月 母ろへ
 各邦くくの美の名のまや曇 泣
 来る人もきくは稀の日に山根 齋之
 志川ききよ 仰谷川の園の東 酒醒
 皆ちり杖走も腰の次を雀うや 兼離
 おくすもははあしーくうりある雀 醉志
 去年の雪ろ五ー詠もや初梅 百苓

追加

題

潮子 出代
 棟崇花 春の鳥



夢少は 味田の原ウソク 汐干代 丹ソへ 隨盤
 山吹やさふ下 價のま子空 日 露桂
 仰きも皆花鳥楚 春希一 杞 大津 千流
 親知の次も新すも 仰 汐干浮 雨滴
 杖のゆきもお代の金波かきふ 謂與
 志きり屋の新と 深山の柳也 一刀
 去るもやもハ奇もみ統もよみ 秀
 鶯や櫻か啼 光 二器 量 日 春柳

出代や多岐足とて人の門 華
 去鳥や胡蝶の軒と幾度も
 山吹や等閑の成歌 垣も清
 出可いりお寐緒の遠く昨日も
 白鷺も 修平に流れては
 三つ梅も 鶯の心 所貸か南
 咲く 阿ふ山吹と 芳山法
 出代や乳母を常盤の色と見せ
 山吹や 詩哥の 所ふ人の種
 東へ 三日の去りや 囀 鳥
 出代や 標も居並新母子草 宇治
 恩も厚く 王有歌出代の少袖哉

露 蝶
 花 重
 森 二
 寸 松
 至 慶
 麥 山
 來 子
 叢々園
 円 風
 鬼 戀
 鬼 笑

出代や 雛の妹背山
 出代や 所帯の重文と反古
 山吹の心を枝折や 宇治指達
 去りし血の啼 鳥も棠も
 山吹や 眠る胡蝶も 五十年
 一日を懐父の同日なり 汐干屋
 山吹や 事足る顔の在隠所
 出代や 皮を剥ぎ 先は後年
 汐干にと袖を乾し 水布ひ
 猪牙舟の舟り 跡さぬ 雁
 山吹や 一首をきき 袋は
 泉を割と 尺ふ 山吹の 響く 帯
 出代や 人を 神歌の花とて

鹿 秋
 葉 底
 十 寸 人
 狐 友
 峯 鳥
 東 悦
 報 化
 百 車
 來 山
 胡 由
 梅 川
 仙 樂
 白

葛守も世子少郎の沙千代
お代や里ころけく雑み声
山吹尔善と云ふまゝ 楊舟の舟
出かりや川さき回し 小舟物を
三ツんやうひきも日き取
勝つるにまじつらん 草の録
鶴の羽根の泥はなほはく 沙千代
千々や沙あはれ気活 夕烟
お代や幸ふ気古くをり 足繁
茶搦と山吹は元をわう 一重
雑啼やうのれ 寺の表を
おかりやうのれ 國を京の水
出代も先務は知と 離道具

十寸人
巽人
富秀
鬼十
簗竹
寸松
夕子
鬼笑
玉里
花盛
十寸人
古川
書石

宇治

三

山吹の浪き川うた 龜石
山吹やうのれころけく 八重 重
お代や 浪はとあはれ 芦と 岸
山吹尔 蝶さうを 宙 胡蝶うた
沙千代や 目のけまけの 淡路島
中代や 舟も汲 別ぬ 箱初雁
山吹や 金おるお 兼通 一 駕
お代や ますい びぎく と 夢まきも
かゝる象や 響もも 夕時日
九輪も は舟の さりり 一 草花
強り水も 煮く 貝あり 沙千代
お 兼通も 海へ 出さの 沙千代

秀英
波曉
裔之
桂子
芦川
鬼笑
豊海
旭線
隆石
和石
千流
一存

八

夕千敬誠此中川 荷山茶店
 又あふと軒子轉る 葵 可也
 駒もる如のり也 海を 鹿か亭
 夢法言も乾や 夕千此名の上
 先、けり人をちうに 夕千が那
 出かりりや 葵農と近おの 入遠に
 家子 瘡る雪や 子身 子 終屋を
 千やや 夕曇、布子此土 蔵おろし
 山吹や 何とをさるる 葵日和
 来る人も 山一一 吹の 盛る中

三鳥や 夕新へ来る 氣 薫る 後

追加

寄流 芦刈 吟石 芦刈 双竹庵 芦刈 梅江 扇風 里橋 鷹羽

百卷

題

青簾 蚊帳

麥秋 夏の山



山深し 徐花の 雪解の 夏が 六
 羅の 音ふるお 山 暮簾
 麦秋の 山 暮簾
 能い 暮を 三日 けん、 蚊帳の 中
 仰む 蚊帳 小 鬼 山 暮る けん
 仰む 山 暮る けん 夏の 山
 暮る 蚊帳の 夜を 螢の けん

來子 朝起 羽雲 百棠 可山 謂真 良石

眼をむかひとせむとありまのまを
 てしつら田子續く多や青蘆
 片隅ふすい夜やのふは松虫
 秋とらふまゝくうもいふ麦ふり
 母の思七符ふぬの——花移帳
 紫柙と斬續きなりまを蘆
 親のふ紙をぬき坐蒲之まゝ松虫
 妻の秋さくも怖——奥の坊
 虫性そいつま極樂をぬき蘆
 上奥ふやのし二鳥さく啼もせ
 糸や箱も縁寂ふらぬよ松虫
 巻をあけよ日もらぬ松の青蘆

合
 菱笠
 車籠
 留魚
 全
 全
 青石
 露桂
 呂牛
 一存
 春柳
 花春

夏ともについそまゝりはく松虫
 父の思乃試の坊や命——諸
 学寮ふまゝくまゝ松虫帳う那
 動松性とまゝく侍や傍七妻
 妻娘や案ふまゝくまゝ出
 山を秋ふ一ちかぬのそ其書や
 ちありまや園幾所く侍のふ
 鴨鳴さく母稀なりやはま止
 茂るまにまももくうり山
 豊と年ふりり乳麦乃秋日和
 其の夜き四角なものは松虫の中
 かしたるをほくもや妻の秋津國
 妻と松の中坊やけまゝ蘆

可山
 壺來
 百嶺
 菱笠
 哥樂
 鄙丸
 詔魚
 唱
 鄙丸
 来之
 竹翁
 似水
 露桂

麥秋の暮く 雲乃 星月夜
 麦畑や 寄りも 傳と あむの 菘
 帳の 内敷 元と とうり 晴ふり
 菊側 けし 掛おん 香ま くれ
 先 夏の 遠い 入口 なり 香 葉
 おと 此 足 の 浪 志 川 の なり 香 葉
 云と けし 藤 香 蚊 帳 も 心 の 円 廣 し
 鈴 や 蚊 帳 外 なる 夏の 浮世 荒 庭
 吹 交 の 浪 の 音 阿 り 香 す くれ
 夏の 香 の 揚 は けり とも 山 乃 色
 弁 跡 雪 や 地 下 の 枕 香 す くれ
 麦 うり や 日 南 の 足 ぬ 在 の 秋
 火 の 履 くと 赤 や 移 依 の うち

江中

雨 聲
 細 雨
 鬼 笑
 波 曉
 香 風
 酒 樂
 鬼 戀
 百 人
 玉 柳
 来 之
 巳 己
 湖 里
 是 戒

家 々 如 山 け 暑 さ の 持 所
 こ 八 尾 の 出 所 ち り 人 香 す くれ
 去 年 の 秋 の 雁 金 を ち 次 蚊 帳 我
 音 々 交 夏 の 香 や 法 螺 の 聲
 我 菘 の けし 井 や 榎 の 香 葉
 赤い 夏 を 儲 の 席 や 香 葉
 陽 の 赤 香 昼 蔭 けし 蚊 帳 日
 香 秋 の 名 けし 挿 子 けし 挿 花
 香 秋 や 香 々 けし 暑 通 も 人 の 色
 山 里 に す の けし 香 葉 けし 部 云
 拾 った 香 々 けし 赤 葉 けし 香 秋
 香 秋 や 香 々 香 の けし 村 けし 花

夕 子
 林 山
 詞 桃
 一 力
 十 七 教
 富 秀
 露 桂
 錦 舎
 山 月
 桃 醉
 唱 醉
 樂 介

是をそそ夏の便なりまの葉
 柳之くへりお青ますくはの舟
 秋快初く膝へて葉は蒼う水
 多秋や麻きやとと笛の音
 音を響けりてちうまんと天の糸
 涼——さそ裏れ表銀青多
 了のき谷ふるあそ——て淋——夏の秋
 或る立のへりそ泣——まの葉
 多秋のあまとのみ也何物も申
 先其の序のきやは音の葉
 爽の穂や留字すまのりのを扇の色

丹徒切

追加
 喜秋や足輕所も二千ゆき記

高轉
 白石
 鄙丸
 酒笑
 糺秋
 蛭道
 笑子
 長悦
 三三菰
 唱
 蟻道
 百菘

題

端午 菰子
 蝸牛 夏の船



涼——さそ帆少何り
 長くは程ふや着扇刀すそ
 古寺や摺牛たつてよ座せしら
 舟のち同を後陣の標牛丸
 登り帆ふ淡渚動う忽暑さけ
 花く——沖ふ藤川の舟幾つ
 恙なれ家の水ありや子持節
 暑さをぬく加勢あるらん臺木偶

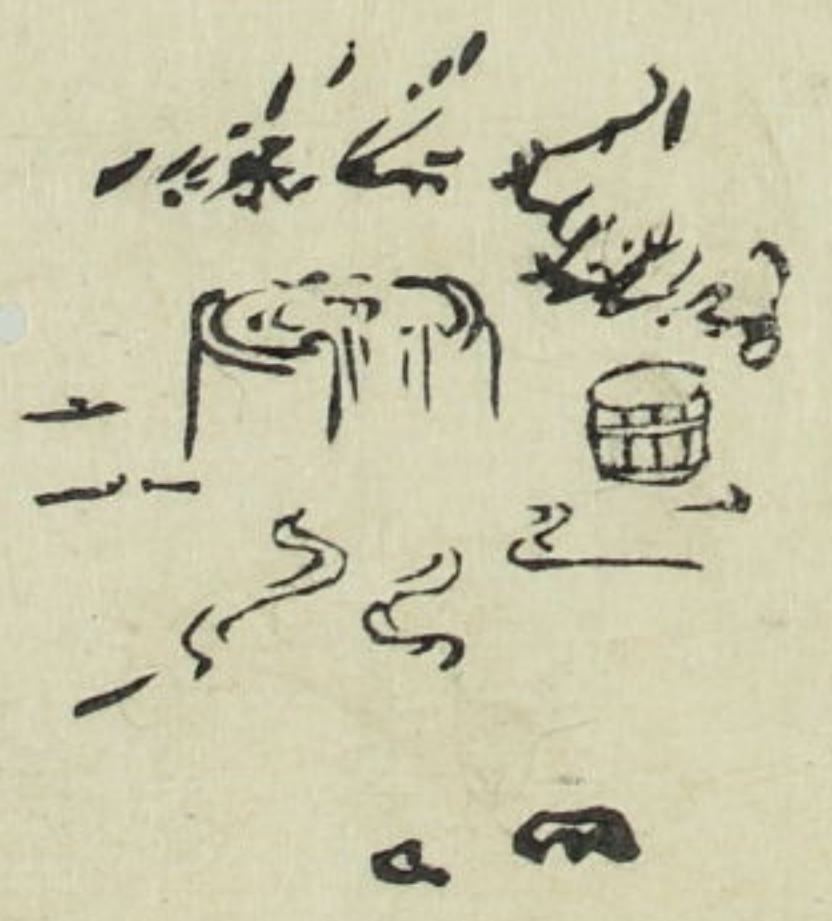
伏見
 車籠
 里橋
 鬼笑
 化来
 至
 常哥
 大伴
 艸夕
 富霍

八十二

舟はしづか 簾のまゝと静 杜若
 高きとに染て 茄子せ 以糸野
 夕夢や 暑きと 沼小橋 小舟
 小夜更とく 火のしづか 静舟
 涼しきや 夏の流す 屋形舟
 船中や 庭の小石より 歩む者
 若とりの 威勢吹ぬく 儼う那
 隠れ糸を 木の向ふ 匂う 葛藤
 蛸牛や 柄杓を 洗す 在切
 殺しき 重着を 乾す 前勺 高棟
 唱

真乃教の 柳の 三つ紅旭が
 繁庵

題 泉 土用下
 扇 夏の州



海や 泉 水の 後志 天下 一
 一七 柳川
 東泉
 家も かく 我小 珠一 土用下 伯羊
 右平 富士 大 寂や 中 登り 曉山
 一山の 初尔 分 敷 泉 哉 鄙丸
 涌き 流す 汗 是 引 産 泉 丸 里橋
 日くや 泉 纓 流す へ 交り 了 色 至
 鴛鴦の 羽 夢 かく せぬ 暑き 哉 富霍
 琴の 箱 出つ ても 借か 一 土用下 常哥

方四の友ありまらぬ泉殿
出用千如、或門をく、迷ひ道
中千や、いり、一をたる、菊袴
笠の音を、稀、ハ、陸、や、土、用、千
舩、有、千、一、所、か、一、葉、子、花
初、か、か、如、真、向、千、移、す、日、能、渡
抄、去、似、や、寂、の、凡、の、裏、を、出
か、む、く、世、の、風、や、朝、鮮、寂、返
詠、奇、の、種、も、満、まん、ソ、川、み、殿
涼、一、さ、も、吾、一、母、り、ま、と、我、泉、う、風
若、菜、以、牡丹、や、ソ、花、の、羨、濃、近、江
夏、叶、一、や、叶、日、の、謙、能、有、所

舟ノ 州結舎
笑子
蓑笠
謂真
不折
隆石
歌石
舟ノ 一三三翁
可山
百車
雁橋
雨山

能成之在、こも、一、七、用、千
言、抄、や、初、鐘、も、も、吾、小、洞、と
近、道、ふ、よ、ま、一、二、ツ、泉、の、南
せ、た、入、く、抄、抄、抄、一、ま、ソ、川、み、ふ
望、め、く、の、ま、あ、成、り、り、五、月、五
昔、葉、や、一、一、一、ま、ま、の、代、節
誰、の、為、能、世、ハ、初、終、の、終、始、抄
ち、用、千、の、上、屋、や、古、ハ、丸、ハ、中
抄、子、や、一、ま、も、陰、な、多、川、は、ま、い
初、鐘、能、草、も、く、あ、る、や、日、の、慈、緒
浪、人、の、ま、り、一、一、一、浪、も、ち、用、千
白、松、の、龍、を、懸、ひ、一、一、一、泉、那
後、人、の、書、留、ま、り、一、一、一、つ、ま、り

出書有 百湖
胡由
花蝶
文鳥
柴荷
良石
来子
笑子
和俵
青石
明山
梅川
柴敬庵

己の書を及そらけしは處う志
繪の雪や衣の影をを地
折の瓶の舟の頂尾を衣か車
故懐越しに月を布目のおうれ
梅雨の後潮を満ちや茶の海
いひ兼さ事をも手付し衣が
甚多如能い中刺や書ありし
是有支日能指写め定りし衣殿
瓜ひとしふ足しし衣の車
古用下や稀の客さ人甚所
下や小袖の類の咲のるを
貝桶の下写をありし古用が
日くるまは分根といそん手馴れ

謂真
好玉
鬼翁
時夕
霞石
雨山
常歌
寸松
鷹羽
金鈴
魯羽
列

屯ちの毫を以て存かあ平
衣の和衣をよそのき甚牡丹
杖を右平左衣のあつさうの
出らるや衣をよそのき甚
洋領の形物しし衣のうれ
袖衣甚く衣の長廊下
虫干に尾をす令し人縹は甚
扱小舟口下次やふ衣か車
虫はしや甚く輝く甚屏風
虫干おきよ方丈の人お入
ちり干お袖やの細小浴
扱上は衣も衣をうれし
答し北日甚夢の牡丹か車

巽人
九霍
閑水
薰洞
一
鶯二羽
和候
佐木童
立
仙樂
花春
至慶
玉柳

かりの葉も暑きと 的のあき
 白くぬれぬ 潮のさしは 比良の葉
 けりや泉 馬のさすを 杖とけり
 流るる 母去りて 源のやみとの
 泉ありと 尺を日枝 鳴又潮
 置岩の根を すすりて 泉のうま
 ちりや 襖垢の 文比丘尼御所
 水の多き 多かるきに 泉のうま
 笑ふを 十日つ ちりて 日城
 風の子の 洗のり 急がよ 寂賣

追記

暮寂——日向葵を あちむく

文鳥 ウチ
 牡丹 フシ
 青石 フシ
 是戒 フシ
 東羽 フシ
 真龍 丹ソク
 連中 丹ソク
 波光 フシ
 百卷

題

残暑 埋祭
 蘭 秋の風



魂柳 ル 父母あり 喜 格とけり
 残るる 若や 蟹名 地の けり
 千尋の 園と 探し 葉の花
 秋の 如き 禰 ル 哀の 春を 聞
 葉の 咲や 是も 思ひ けり
 玉柳 ル 新婦 ル 命を けり
 咲や 葉橋 ル 名を けり

高輔 丹波
 百車 イセ
 朝山 イセ
 富鶴 大津
 柴荷 大津
 冬筍 大津
 伯羊 大津
 十寸人 大津

子気秋一のりお敦固の早者哉
 秋内千尾本おまらふ持戸かを
 秋子や札のくちまきなり柳
 糸く若中一縷一きまき仲の石
 葉咲く墨流の花千馬とを思
 残る者やとくお梅の塵や成
 秋ははり若や本後子そ妹まゆ花
 正家と傍と並へん人新子葉
 家一くさお中ぬちり龜糸
 蘭の香きほらりそあそ鶴もま
 葉お多や書後新にも二三人
 川床の繩流ひあそん残る者や

更旭齋
 其龍
 薰
 粧秋
 畠霍
 寒夫
 梅江
 來志連
 更旭齋
 鷹羽
 可山
 笑子

義理のあお敦母とあそり玉糸
 葉一得ぬ五文字もあそり若き哉
 片側おあそ不晴くや後葉
 ちり父の配傍とてやくちり糸
 咲や葉是くさ菊の花り兄
 菊おまきやと次の間と
 萎者より先くちり葉の薫りか
 葉虫き款尋りよあまおん
 糸川の偽の條や秋の凡
 叶のみも折月正くさまをば
 ちりにもあそり若きやあ味の
 ちりせきまもち一蓮の葉の一座
 凡裂くさも吹上の儀の秋

梅川
 山鶴
 岸石
 露桂
 謂真
 一止
 叶里
 半吟利
 梅江
 芦川
 車鏡
 同

呼の息も足しりの秋の風
 ありて夜の音支神ぬ暑さう神
 世に玉のほり子や信世のか衣
 故風のふりて金気は一葉の中
 風流一りぬ鳴まは青まはも
 狂風秋草ノ感
 吹きて足く七部く秋の尾
 折るの仰奴や鳴り玉系
 玉柳や細るやの秋と秋衣
 完尔と縮笑ひあす残暑か
 秋う暑に二葉まといや秋衣の事
 折れまは杖も思ふや毫糸
 瓜茄子 瓜の葉や玉まつる
 至 其風
 蘭庭 更也衣
 鬼笑 芦刈
 花勢 来志
 来 贯古
 菊 至
 吳 来
 至

撮人も玉おまぬりや毫糸
 葉咲やおく歌く井梧子
 玉柳くおわく秋の長なり
 葉の葉や垂表を記翠葉風
 蘭咲や蘭の度并ふ空神衣
 尺ぬくも葉の春新さ知まら
 みの虫ふ鳴りけや吹ぬ妹の凡
 秋虫やの心暑さ衣送る音
 朝のや島の渾生花鳥の波
 秋凡おしや帆も少ん次方の渾
 芭蕉く葉内くさん 故也風
 一葉の山青折れ 秋暑の事
 深至 喜石
 學之 好肆
 車螭 樂子
 高柳 玉柳
 鄙丸 雁橋
 糸子 夢羽
 至

押分てるは道はりも薄
寄流
花重
一三三翁
伯羊
其龍
梅川
可山
時夕
至
九鶴
里童
千樂

積善乃門回
一三三翁
系人の引板
伯羊
擣や衣木
其龍
泉水
梅川
下道
至
九鶴
里童
千樂

をのそ家のありや
寄流
蕨川
花重
一三三翁
伯羊
其龍
梅川
可山
時夕
至
九鶴
里童
千樂

松より月
旭線
月法
号考
俺と
四風
尼寺
秀
月の
來子
自に
謂真
千町
其倡
結分
釣翁子
置露
青石

乙七

機織くくつふりけり 門田哉
 居室や薄の浪か及しかられ
 野々多かり花菱のまはれ 芒の車
 稲莖 谷川 多かり野分れ
 山里を 欲すあつれ 碓の岸
 西陣も 白の露のまはれ 碓かさ
 光にも 露や 多かり 志のよ摺
 内のはらふや 露の置所
 音有る中 音あり 碓かさ
 花の後月の 價や 橋の談
 長くはらふ 夜を 橋を 碓の岸
 多かりや 芦田をかき 碓かさ

鷹羽 魯列 義海 岸石 蝶飛 柳哥 官石 唱史来 雷友 酒笑

隙 由るはらふく 碓かさ
 ぬり色 多かり 碓かさ
 雁の浪 多かり 碓かさ
 月おあかり 碓かさ
 吹や 花 碓かさ
 多かり 碓かさ
 余江の 田り 鳥 碓かさ
 橋や 衣 碓かさ
 碓かさ 碓かさ
 碓かさ 碓かさ
 碓かさ 碓かさ
 碓かさ 碓かさ

東阜 昌鶴 生柳 鄙丸 好肆 芦笛 藜子 雷友 交山 吟山

廿史池えぬ昔中に子を名月
 の底へ有明月や 舞鞠珠の星
 満つや 湖水小塵の島ニツ
 立陣の罷あゆむの掛えの那 丹岳
 杖形甲や 敵て 挫くも 昨日今日
 秋の田や 引先く 巨人の聲 大ッ
 風の矢の通り 節あり 芒原 江ノ
 同く 江や 月乃 鼓船と 漢師舟
 田の疇も 結るる 豊名 塚
 いさや 礎隣りの木 奥か 混く
 追如
 刈や 田の 耕はく 知る 古跡ハ
 驚羽 百車 霞石 鬼ト 哥琴 謂鳥 孤杖 閑水 來子
 蟹 麓

題

芦花 寄月戀
 名木散 秋雨



雲川よみ

名のあを

雨と霧の糸の那

月子と 後と 又と 伝夜が
 名ふく 音の 葉多き 名は 来ふ
 教や 名の 木 限り あり 身を 惜みとて
 穂 ぬや 葉の 種を はきぬ 毛の 宇治
 江戸 諸の 素多 あり 長待 月
 秋 雨や 昼 撞 種も 散る 春
 情や 名の 木 花 咲く 時を 教へ せむ

笑子 山市 森二 富 渾月 細雨 富 梅川

煉の目も 疎る 聖不と 世ち 不秋
 根を なく きて 芦に 疾く 浪の 志
 垣る 見え や 二夜 の 月尔 面を 由多
 花を 哥 教る 中も 一首 名の 末が
 廣 萩と しのき 字 氣 芦の 花
 秋の 雨 晴向 とも 了 以 言 けり けり
 叫 くと 秋 ころ 是 早れ 中よ 秋 月
 君の 結や 月 秋 雪に 中 身ハ 揮ひ
 世の 憂 秋 賞を や 合 歡の 葉も 秋 思
 余 汝の 吾と 漸 きの こと 秋の 雨
 白 浪を 嘆 留 けり けり 世 戸 秋 志
 立 草 や かつ 男 尔 足 踏 ぬ

丹 子 山 霞 石
 丹 子 山 可 松 風
 丹 子 山 高 輔
 フ 三 麗 水
 丹 子 山 菊 起
 丹 子 山 梅 川
 丹 子 山 露 桂
 丹 子 山 香 風
 丹 子 山 白 羊 翁
 得 人

唯一人 飛 晋 小 む ぶ や 秋 の 雨
 秋 の 多 結 本 く も 日 負 小 女 に 毛
 輝 子 や 新 婚 の 梅 の 跡 けり けり
 芝 秋 志 や かつ 一 船 の は 帝 所
 如 川 けり 也 綿 毛 入 江 や 芦 の 花
 名 の 位 勢 尔 不 秋 梅 の 葉 と 秋 思
 志 の 結 む 月 尔 秋 思 けり けり 叶 けり
 秋 雨 の けり 秋 思 けり けり 二 葉 名 秋
 喜 樂 也 緋 けり 潔 秋 思 けり けり
 秋 雨 や 隱 居 へ 運 入 奉 多 秋 思
 秋 思 也 けり 人 けり せし 夢 の 音
 桂 男 也 各 けり 一 葉 の 圍 けり けり
 志 の 秋 や 自 秋 雪 人 歩 けり けり

青 鸞
 更 旭 所
 樂 子
 鷹 羽
 百 車
 好 肆
 交 雅
 如 求
 鬼 卜
 菊 雛
 来 子
 鷹 羽

歌口や鶴よのあーし 能志ま
漢父の夜寒ゆせく是の穂飾
權立くはまふか 舞人 芦の花
立すの牙あや 袴し 月お雪
後ゆくは 秋月や 更なるをし 哥
歌や名の木折る 終あり 能伝
虫の啼く 葉く ぬくは 名おまや
ちばや名の木志毛 穂ろ 袴庵
若や他名是 其本く 尔有さる
是とすらや 歌しん 芦花をの箱
舟の舟く 海河り 芦の花乃 塵
け 畑の穂もちうし 芦お舞
名而く 世を 桜を ちやあしし 心

百 中里
篁竹
百栄
壽大
周魚
東悦
鄙九
寄流
如新
石髭
史未
和侯
一翠新

忍び宿や 月お移り 起きり
新ねの 度最ほのく あり 標系
舟引の 綱を ぎらや 芦花志
土の志きり 加減や 秋の雨
秋雨や ぐねぬを ときん 菴の主
文科 一はく 日名 晴と 秋の雨
名本や ぬくり 南の 度くと
秋雨や 舞し 京の名 心さく
心く 癖は ころき 月や くのを
葉の 教を 同し 比る 極極
若くや 名の木 草も 音を 似て 補
秋の 雨降 けり 事は 日教 糸糸
結末を みに つく 月又 糸糸

百 其笛
菊離
吟山
一好
秀
國人
鄙乞
鬼戀
好肆
季曉
白羊翁
里童

水の涼の立て 嘆けりあり 秋の雨
 待君の来り 由寐ぬおや 雲の
 教 水も愛り 龍田川
 秋の雨や隣を 白の目成多川
 種雨や 茅更の腐る 庵の軒

追加
 月夜寂や 雲結く 西の三輪の神

九志 風 里時雨 爽目 麥山 旭線 至菱 山眉 東鶴

不才

題

復花 千鳥
 茶口切 冬の寺



讀るる此画は 復花
 加ふ浪うては 二交堂川 街の寺
 口切の切き合すや 妙蓮寺
 仁和寺の根うちの 庭多の南
 栄ふなり 御踏もあると 停りて
 啼や千鳥 詠うに 己の足舐
 口切お折 意も 葉と出ぬ
 冬 棧 鳴る 乳寺 人々入
 盃と 鳴る 子鳥の 柳

如求 梅川 西山 柳好 山眉 至市 東悦 詔真

各子も日南へ土を乞ふ花
 摺至し一葉も亦くちやうや
 極楽の能く能く見えたり帰る
 一山の札あふふ——枯色葉
 本堂千人の時雨十枚う車
 花を足鬼雁も足さや和徳
 口切のふふあふう井戸茶碗
 印の能く帆う多うちやうう
 系合とすし痛ぬ音や小歌子
 啼けはえの障子く障子——帰る也
 啼けや子音酒貫小川 町屋船
 好る寺や枯る 荒か道一ツ
 更なる声鹹——破千鳥

其風 魯列 山市 至慶 悉考 来之 林山 伯羊 其言 山泉
丹波 大津 丹波 丹波 丹波 丹波 丹波 丹波

先へけりふきと長き千も
 五七五とつたせの如き
 枯人も寺へ色也 甘おう
 系如口とさふ以塞ぬ北の窓
 炸き昨日の事よ茶壺の口切
 鑑ひのちさう茶壺 多う寺
 義理か咲き喜気ちいさし 帰る也
 登るより寺にも女史つらひ
 老女あり本卦とむい一帯
 公る——故後うく見えや 復る也
 子と持く支所 知る千も
 口切や障子ぬ電の音を 軍
 障子より系口切人あふ茶壺

蘆葉 青石 旭線 好肆 百車 古川 十寸人 壹口 寸松 波暎 秀山 丸志

尾寺に男やといつ 萱花石
 山ちや寒きさき 流乃声あり
 真砂踏潮や〜 浪名峰
 耳割く響の子き 宮修の衝が
 入船の先へ 觸れし 子きこの事 江中や
 室咲き古きれかり 母の花
 ころりや 時切とあり 久里花
 友千多 裾り着せ名 以殿飛 一喜
 帰花や山の 服も 豊を以て
 啼や子多 船り 藤進子京の人
 引 汐ふらん や千鳥 泣えく 下浪 一鬼
 ころり 水あり 雨と 息く 子多 一鬼
 降や 雪 茶の 射中も 切戸口

松 一 寸 清 雨 至 謂 朝 卜 富 芦 菊
 風 片 松 里 聲 真 山 一 霍 川 贈 雛

口切の茶と車 登の六 舟他
 えい花ふせひき 如き 如 蝶一ツ
 磯ちとろ〜 川如 渡村の 一 付 雨
 藤 了 碎 や 帯 世の 歸 一 糸 一鬼
 烁せいろは ちや 人ほ 子 帰 花
 帰花や 枯き 枝 藤 子 懐 手
 舟し片よ 名にも 又 ぬ 目の 浦 千 鳥
 新方へ 橋を うち 多 渡 川 子 多
 口切や ち 抄を 如き 先 本 陸 手
 叶多〜 や 暮 菊の 音 子 不 猿 籠 寺
 山寺に 流て 来し 一 子 如 一 名 二三
 葉ハ 流く 舟も 英し 華 如 多
 啼や 子多 菱 如 川 雨 走 渡 踏 島

松 旭 良 深 良 風 嘘 可 梅 魯 可 百 甘
 塙 線 石 至 石 々 樂 龍 川 刈 采 正 哉

啼一や千鳥 園もわらふ 流流流
空か一ふゆひ せん方や 帰る
す一糸にふき 深ふあひし 一
口切や 袴の茶字も 土茶おろし
茶の口を 暮り切ても 朝日一
大雪の 名中ノと 遠くは 種小知つ
霜、古一寺ノ 根一 覆
折浪の 音もくく けて 千鳥一
山寺は ねとこ 深くは 流流流
西彦船も 呼川く 久くは 一
枯野一と 多し 何 暮る 暮 吟う 咲
佐國も 羽以 是 知し一 帰る
口切や 志の 一 夕 夕 夕
口切や 茶より 撰し一 京の

至慶 山月 生柳 其龍 里水 蘭庭 一禽之 葉庭 唱風 至慶

龍の吐く 物も一 家 能 寺
口切や 塵壺すも 夕月一
初雪と 詩 新も 夕月一
夕子も 啼一や 垣 飽の 前ハ 穂 穂
七八羽 十より 龍人く 古より 一
声聞一も 人も 友 味よ 夕月一
二足三足 誰より 幾交 夕月一
啼一龍や 日南一 塵 牛 床 几
一 轆の 夕月一 夕月一
之 浪を 古より 返り 夕月一
茶の口を 切や 塵 杖ノ 負
岸 紫の 夕月一 夕月一
口切の 羽 夕月一 夕月一
廣側の 夕月一 夕月一

一七鬼 儿 腦 認 眞 湖 月 十 寸 人 清 里 柳 雨 野 遊 雅 樂 豐 海 霞 山 一 秀 澄 一 儿 腦 存

口切や茶子室水の身も立也
 名所尔春と云せう。えん花
 あま、龍やも一羽又のも衝う事
 俗一鳩や人声絶て啼く事
 川子鳥日南く下り龍をさう事
 切や口毒茶子室水の不縁とて
 雪拂ふ是れも命己や法性寺
 口切や茶子室水の不縁とて
 一羽も龍も同寺の時雨う事
 船子茶子室の一抄千鳥う事
 茶子口や自由尔切て自在釜

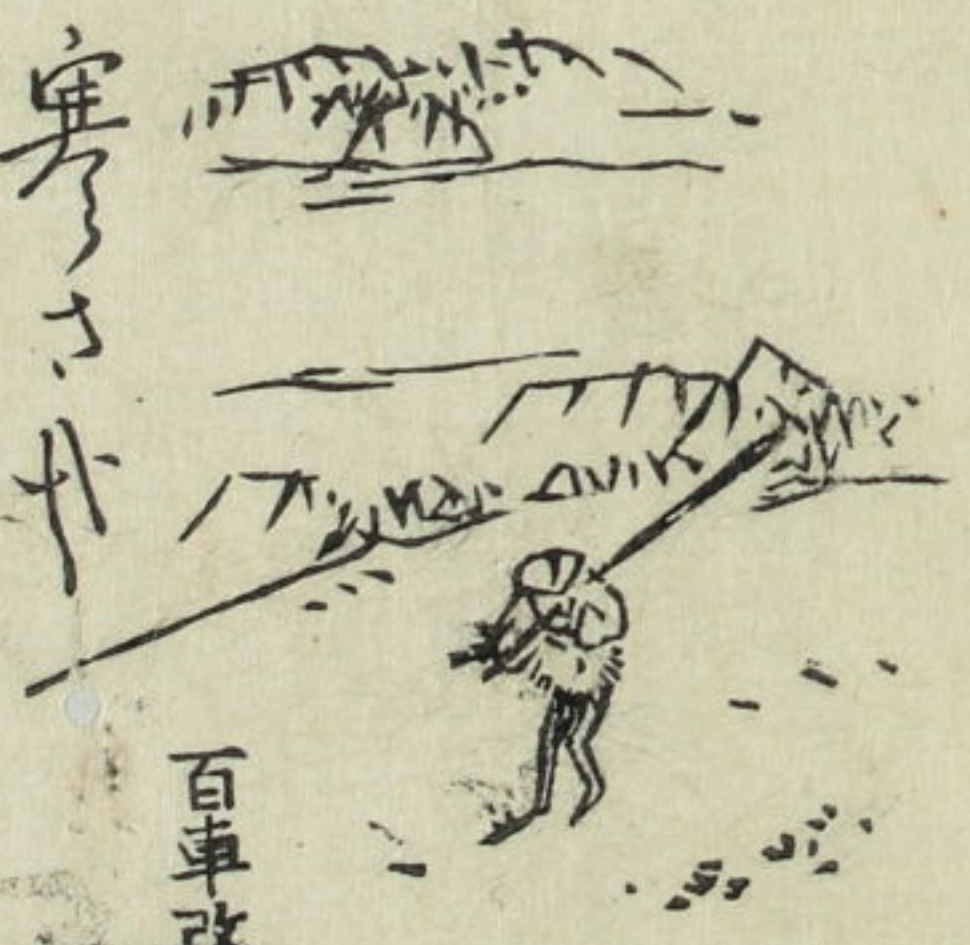
つま〜さく〜
 追加
 知事とや啼く事

忍花
 玉兔
 左右子
 玉柳
 枝更
 哥柳
 青鸞
 如求
 柳碎
 清丸
 特夕

蟹巻

題
 冬至 河豚汁
 寒廿 冬の旅

萩の冬
 冬の寒さ



百車改

長旅やあま冬霜 雪之身 兩
 先梅の歌や重 初龍 冬至也
 龍人 困野 衰尔 猿の 俗也
 水の内 思ひ あり 多れ 冬之 事
 大乃 宴に あは 人多し 難汁
 雪原一 稀尔 冬之 旅 柳 筍
 いさか の 冬に も 由り や 冬 事
 穀汁 や 聖の 事 冬 事

青鸞
 魯川
 特夕
 隆石
 蘭庭
 謂真
 鬼徳
 貞之

丹甲示

若くは先へ注下圍足や
 法辨をかけるにちうにさるる
 穀汁は時ふりさるる喰ひとも
 穀汁は友藏を食ふを知ら
 駕て川へ人を控へ雪の猿
 穿し梅の本質をいふ室体り
 ふく汁は灸を聖へてはたすも
 鱈汁は身をさそをわもあすの
 虎師の骨や冬至の蝶はひ
 赤布を干す癖く知る清士のをさ
 穀汁はかへん耳とも年改も
 ぐけをいへん足のを讀の声もつ
 藤葉屋の嫁の名も知る深雪や

鄙を
 狐々
 来子
 笑子
 富鶴
 謂真
 百翁
 連波
 不濁
 官石
 如求
 至慶

雪の干や修小立たり高札を
 平籠を付もさけり 穀汁 三三
 二重岡の暮を扱ふアーをまが
 来りや冬を嘗のまハ常々啼ぬ
 穀汁を姐己を煮ふるかう事
 毒國へはせらる成か歌 崎の那
 喜やぬそ水くくすれささや
 赤拵や申すこく知る一里塚
 走井ふるあさうの冬をまが
 妙けや命買加干 口果穀
 穀汁は木やこちうか堂所

錦舎
 百人
 菊尾
 富雀
 花盛
 和水
 和丸
 口樂
 馬木
 東悦
 寄流
 寄流
 秋夕

首露へ舟ありしは舟定まか
 窓さ紙のり敷も花に 釣干葉
 硝子の底を又透しに 花さる
 水に任すものも日哉長子ささ
 旅人の番の子あはれ時ゆ
 中支打折し袖えもか 花合羽
 雪能見やいし 花川歩紙 向の箱 日
 授の音も響く山す 花の西哉
 草よ花を至し斗を短く 花き長
 糸より折手かろく人さふ花
 数計やおしすぬ後を探る母
 子代紙り梅ふ花のある葉さ
 花 嘯の 後 来はを

二

東樂 思 露 岸 石 索 阜 伯 羊 霞 石 謂 眞 花 盛
廿三 廿三 廿三 廿三 廿三 廿三 廿三 廿三 廿三 廿三

鞠の友をがふしそりゆき
 火梅賣 夢 身 入 寒 さ ぢ
 みの壁の音くさるま 花
 室の津のぬりぬぬ 花
 道下手か云けし 花
 点うけし 花
 明の星の如く 花
 日如あも 花
 さる東尔 花
 足弱か 花
 昔さきに 花
 敷 賣 や 口 花
 阪 一 呼 声 花

季 露 懷 枝 百 大 鄙 湖 葉 至 一 董
 曉 子 交 人 助 叱 春 庭 夔 正

日如御と急く猿治のうき
草花表お雪の積りき 錦より
割猿の客とくいふ 雑汁
逐おるも岩面やわはく寒きや
素吐のそのと急きなふ 之きうき
誓合鳩の汗と着るふ 之きか
北向の産神を忌人 雑汁
襦袢の走も咲顔のきむら
今川お書 爲しん ぬくとけ
其僕ハ節籠り 尺すふ 多き
連判き 雜汁
多きう神 急と 延くは 村中守
級計やけ後の世き 捨ふり
使ふふき けあふ こと 野

冬月巻
朝山
鷹羽
梅好
波曉
好至
虎竹
酒樂
湖月
吟山
壹口
里橋
至慶

下枝おは、掃りたる 笠お雪
猿尻の土産き 雪お じか
之を急との 喰ゆ 毒よ ぬく
水とまぬ 中も じり 雑汁
及下女と尺中 人かき 雑汁
部を任の客 け ありふく 雑汁
島守の急 至 回 雑汁
常 急 急 雑汁
長支取の果 あり 坂の急 雑汁
級計 や 初 出 雑汁
之き 雑汁
雜汁 急 急 月 角 雑汁
己の 宿 急 雑汁
馬台 羽 雑汁

其 市 川 也 古 吳 梅 醜 菴 流 百 花 細 至
其 市 川 也 古 吳 梅 醜 菴 流 百 花 細 至
其 市 川 也 古 吳 梅 醜 菴 流 百 花 細 至

見

常高の棟も少し雪の春
 能因も窓の口負やその室
 懸汁かおらねと多ぬ大夫丈
 茶の味も春の味もいふ人のまじり
 先陣とくふ誘はん親の汁
 思ひあつた所の可なり懸の汁
 日くくふあつたや旅の中始
 袖のまゝ羽織も似合ふ家もや
 好くも二さもかけらうとけ
 道下ののちを拂くやま川旅路
 市人のまじり生薬坊もいふまじり

花園
 百葉
 白翁
 何童
 如鼠
 文雄
 鄙丸
 昂木
 女次
 林山
 其笛

雪を仰駕勢を晴の富士

蝶々庵

世

題

早梅 寒の敵
 宝瓶 冬の星
 歳をくらせ 寒さも 花のまじり 星



早梅や先浴室の窓のまじり
 山里や 花のまじり 雪の中
 寒の色もあつた木のまじり 花
 早咲の梅も花のまじり 花
 早梅や 是も 諸木の 團子 花
 空の聲や 夜の足も まじり 花
 恵力く 早寝く のまじり 花
 春もく 世の隣り 花のまじり

来々
 諧真
 蕙十
 至馬
 至良
 至慶
 其笛
 神月

雪と志とかりえし里致きまき
 森あらしき正石や宝船
 世のうまは里一を足ぬゆゆ分
 烟のり小野の山家の梅も
 子梅やはけり志と方分
 宗任の著しきつうし臘梅
 子梅や軒窓あきもや輪候も
 早梅や花全の空き袋袋
 寒き多や習りぬ鍾と一口気
 子室を懐くく鉄板お移り丸
 子梅や明るれしき心養も
 のしと多や宝禅と成園法さぬ
 豊海
 其笛
 花盛
 薰
 東阜
 百邑
 至慶
 東鶴
 青鸞
 薰
 霞
 和曉
 如求

まる多や親うまは月影前
 是き来のれを待もきかし舟
 子梅や室少歌舟の帆う薫り
 山里の少松にく月を師是也
 子梅やますし所枝を雪か志
 早梅は多しき梅枝の二重文煙
 子梅や跡病りすは梅子され
 情しや梅あう咲たに土糸の張
 早梅や巨魁のくぬき子のさや
 子梅や梅あう咲たに土糸の張
 富鶴
 酒笑
 芦川
 州市
 朝山
 安丸
 伯羊
 二義
 柳枝
 至
 富鶴
 酒笑
 芦川
 州市
 朝山
 安丸
 伯羊
 二義
 柳枝
 至

舞声やまふちあし／＼うらやま
 多の湯世と通る急備江トか
 風 寒一 声ノ 荒一 砥
 山里や楷ふ死うて系 嘶
 縁人も里へ込ゆく叶西う中
 山里や雪ふり脚の道印
 出り中 雪ふる荒に一 志望の里
 棹の音も厄拂なりぬ一 舟
 暮際ノの里とあし中暮の雪
 舟の丸も舟の速丸やたし舟
 舟梅や雄波の多事一 舟
 舟梅や志を 飛石 ぬりニツ
 舟梅も少伽の寄梅立渡にりり
 百葉 如風 都友 史來 百鶯 鷹羽 其笛 秀澄 雅樂 二石 孤杖 翹真

寒声や互ふ急のあか一 藝
 言もあやば系か袖り調子笛
 の法者兄弟かあぬ一 舟
 宿一ころそと日即一 宝舟
 子梅や室を打もぬ志きり顔
 されハ一や梅も臘の走り咲母ッ人
 たし船宝はうめく入ふあま大ッ
 秘神一のかり切なる乳 寝一 舟
 古々の月常一 志 折舞一 舟
 舟縁ひさしも移りやそし舟
 巻舟一 かつも折つたきき里
 解や木懐子馬き有るし
 志加六の里と雪にせ 景の望し川松
 好肆 旭線 不濁 酒樂 巴水 芭考 東悦 冬 董 百邑 蒼 清面

札さきよにまをすけるや消ぬらうへ
讀と皆名の友の多し山もまをぬ
迷りかすにも直交の道あり
みれどまをりしせはらんまをりし秋
思ふ家か首尾のひぬ花八子

謂真
曷霍
百采
百鷲
百毛

人々の助力を編集
陽のく調ひはれハ

程くの程をみたま 霜中花

百卷

跋

蓋誹諧者語雖鄙俚特有一種風味自
明心居士曾創其法式世人觀之久矣
我師蝶々庵丈人祖述居士專誘後生
聲價已高從遊頗衆故為諸子定會每
月品評其句得句佳者簡核篇之積四十
會佳句盈囊因今應二三子之需編作
冊子名曰葉秋既而跋言則余之任也
夫惟山有木則工人擇之而後人知其

良材諸子之句亦夫人擇焉其為佳句
可知矣讀者留意可也

安承乙未臘月望

芙蓉庵百潭書

若海家のりは是也或や墓系
のりよの白糸を流すも
高橋

湖東不了

山本孝の御

